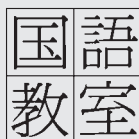


特集：いま、鷗外を読む



October 2022
大修館書店 118

〈インタビュー〉平野啓一郎 聞き手：高橋龍夫

文学とは「問い」である

——鷗外の魅力と普遍性—— 2

エッセイ 鷗外と私

大根おろしは汁を棄てず 小池昌代 8

西欧語の中の「舞姫」 澤西祐典 10

『即興詩人』から広がる文学世界 森まゆみ 12

論考 鷗外に一步近づく

森鷗外と女性運動 美留町義雄 14

森鷗外の漢詩をめぐる——日本の言語文化に関する一考察 古田島洋介 18

「舞姫」を読み直す——比較読みによるアプローチ—— 山口徹 22

授業案 鷗外作品を教える

歴史小説から「歴史そのままと歴史離れ」を読み深める 初谷和行 26

新任教員による通信制高校での「舞姫」導入 野口優太 30

「舞姫」の授業の一提案——「椋鳥通信」を援用して 橋本剛 34

『明鏡国語辞典 第三版』を使って「舞姫」のこトバを探究する 編集部 40

『ビジュアルカラー国語便覧 改訂版』を使って「舞姫」の世界を探究する 編集部 42

大修館書店 学習辞典・国語便覧のご案内 中面カラーページ

連載

県立いまどき高校 国語科だより ... 木を見て森鷗外を見ず いのうえさきこ 38

〈対談〉詩の教室へようこそ⑤ ... 呼吸をするように 若松英輔・和合亮一 44

いま、高校生に読んでほしい本 ... 養老孟司『養老先生のさかさま人間学』 内田 剛 49

コトバのひきだし⑩ 「やばい」信号、黄色か青か? 関根健一 50

国語教師のための

古典文法指導講座⑩ 疑う「や?」と問いの「か?」 大倉 浩 52
——紫式部にファンレターを書こう⑦

青山あり! 中国祠墓紀行⑦ ... 三蘇墳(河南省鄭県) 平井 徹 54

コーナー

投稿 「読むこと」から「書くこと」へと連携させる授業作り 秋吉和紀 56
——「枕草子」の類聚的章段を手がかりとして——

えつらん室 品格語辞典／医学をめぐる漢字の不思議 60
「羅生門」55の論点／「走れメロス」のルーツを追う

国語のNews & Topics 62

〈インタビュー〉平野啓一郎



ひらの けいちろう 小説家。一九七五年、愛知県生まれ。福岡県出身。京都大学法学部卒業。主な著書に「日蝕」「ある男」「本心」など。講演や文京区立森鷗外記念館の特別展「読み継がれる鷗外」への企画協力など、森鷗外について精力的に発信し続けている平野啓一郎先生に、森鷗外の人物像やその作品の魅力についてお話をうかがいました。
(聞き手) 高橋龍夫(専修大学教授。大修館書店国語教科書編集委員)

文学とは「問い」である——鷗外の魅力と普遍性——

鷗外からの影響

——まずは、鷗外から受けた影響についてうかがいたいと思います。平野先生は鷗外の小説作品すべてを読まれたとお聞きしました。

小説と翻訳の作品はすべて読みました。「舞姫」から「北条霞亭」までを通して読んだのは大学時代です。自分の文体を形成する上で、鷗外の作品を一通り読んだことは圧倒的な影響がありました。ほかにも、小説家になるなら読まなければ、と考えて、漱石や芥川の小説もすべて読みましたが、鷗外がいちばん肌に合いました。

デビュー作の「日蝕」は、鷗外の史伝や「即興詩人」などの文体・語彙の影響が大きいです。鷗外の史伝の文体は「春秋左氏伝」などを元にしていて、語彙もそのまま用いていることがあります。「日蝕」が中国語訳されたときも、中国人の訳者に、「中国語で訳せない語彙は一切ない」と言われました。擬古文というわけでもなく、鷗外にヒントを得ながら自分なりにアレンジした結果生まれた文体でした。当時、中西進先生にも「新しい文体だ」と評価していただけて心強

かったですね。

——漱石、鷗外、芥川の中でも特に鷗外に魅力を感じたのはどのような点でしょうか。

作家として、漱石や芥川よりもはるかに大きいと感じます。自然科学者でもあって、問題のとらえ方が大きく、人間としておもしろいところがある。

主に筑摩書房の文学全集を愛読していたのですが、注釈が詳しく、見開き単位で入っていて非常に役立ちました。初めは全部読めるかなという不安もありましたが、文体に魅力を感じつつ、どんなのめり込んでいった時期でしたので、そういう文体で、という構成だと読者が納得するのか、という点に関心があつたんです。論理的整合性だけでなく、リズムや呼吸による説得力という点も非常に大きいと思います。

鷗外の文体はリズムも心地よく、それ自身につけたいと思う、読むだけでなく、新潮社の朗読テープで、「高瀬舟」や「寒山拾得」の朗読をよく聞きました。

文学者たちが見た鷗外

——私は芥川の研究を専門にしていますが、いろいろ読み直してみても、芥川も鷗外の影響が大きいのだなと感じました。

漱石より、直接的には鷗外の影響のほうが色濃いと思います。歴史を題材にした作品も多いです。漱石のお葬式で受付をしていた芥川が鷗外に偶然会い、「あれが、森さんか」と非常に感激したとか。当時の文士たちから仰ぎ見られるような存在だったのでしょうか。

一方で、観潮楼（鷗外の自宅）を訪ねた際の印象などを書いているものを読むと、わりと気さくな人だったことに気づきます。「失敬、失敬」と言いながら部屋に入ってきたり。

また、子供たちが残した思い出話などを読むと、本当に「こんなお父さんいるのかな」というくらい大きな愛情で、子どもたちを育てています。そうした本を読んで、やっと僕の中でも「鷗外ってこんな人なんだ」というところがわかってきたのです。

——作品から感じる距離感とは違う一面が感じら

れますね。

永井荷風の「断腸亭日常」を読んでも鷗外に対する尊敬というのは特別なものがありますよね。寂しそうに回想しているくだりもあります。

僕自身、十代で三島由紀夫の影響を受けたのですが、三島も鷗外を崇拝していました。好きな作家が尊敬している作家ということで、鷗外により関心をもったわけです。あとは谷崎、荷風、芥川など、好きな日本文学の系譜の作家たちの多くが鷗外を尊敬していたので、興味をもちました。

女性の描き方

そして、その彼らが漱石にはほとんど関心がない（笑）。個人的に、漱石は女性の描き方が好きではありません。二次元的過ぎて、生きた人間という感じがしないというか。「坊っちゃん」「草枕」「三四郎」などの女性を見ても、生きた女性のリアリティがすごく乏しくて、男性目線で書いた女性としか思えないですね。

その点、鷗外の描く女性はリアリティがあるし、芯が強く「生きている女性」と



いエピソードだと思います。

鷗外は江戸時代の武士の家に生まれ、切腹の作法や蘭学・漢籍を学んだ最後の世代です。それをふまえて、近代以降の日本に生きるという感覚がありました。さらに、ヨーロッパでの強烈な体験。この三つの視点をもって考えたとき、環境次第で人間は違ったものの考え方をする、という相対主義的な見方を身につけていったのでしょうか。

いう感じがします。もともと樋口一葉を認めたのも鷗外です。当時ドイツで開かれた婦人解放運動のシンポジウムにも、日本人で唯一参加しています。当時のフェミニズム運動の起源に触れて帰国しているのです。鷗外の作風にも影響が出ていると思います。

――漱石の木曜会も男性ばかりでしたね。

荷風や谷崎など、女性好きの作家はやっぱり漱石がぴんときてないのでしょうか(笑)。教科書には「舞姫」しか載っていませんが、「うたかたの記」「文づかひ」も合わせてドイツ三部作を通して読むと、当時のヨーロッパ社会での鷗外の姿がよく見えます。極東からの留学生として、踊り子やカフェの女給といった階層の女性とはフランクに付き合えるけれど、「文づかひ」のような貴族の女性とは手紙のお使いほどの役割しか果たせない、というような。「舞姫」のエリスだけでなく、三部作で見ると、それぞれの社会階層の女性がどうやって生きてきたかということがよく描かれていることがわかる。「文づかひ」におけるイイダ姫のような非常にしつかりした自分の意志をもって道を切り開く女性。「舞姫」のエリスのよう

自己責任論に抗って

――鷗外の思想についてはどうお考えですか。

鷗外の思想は、最初はよくわかりませんでした。作品を読んでも、思想などよりも「経緯」や「事情」をずっと書いているという気がしていました。

な社会の底辺で苦しむ女性。「うたかたの記」に描かれる、宮廷画家の娘がカフェの女給という庶民の身分に没落した姿……。社会階層と属性、そして自分がどの程度関与できるのかという視点から、当時の女性の現実をうまく書き分けていると思います。

――明治時代に、ドイツ三部作のような作品を日本に書いて伝えてくれた功績は大きいですね。

あの男尊女卑の時代で、貧富の差もある中で、この貧しい踊り子の女性は、かわいそうじゃないか、ということをやうまく描いているというのは重要なことです。豊太郎自身も美化して書いていくわけではなく、一つの問題として提示している。ただお話を作っただけではなく、「文学作品とは、何かを問題化することだ」ということをよく理解していた作家だと思います。

「諦念」と構造的社會観・人間観

――「諦念」についてはいかがでしょうか。

「諦念」は個人の努力や決断の限界を意識していた鷗外だからこその出てきた思想です。人間が社会構造の中で相当規定されてしまっているという見地に立つと、他者に対しては、仕方なかったのではないかと、という理解につながり、自分に対しては「諦念」につながるというのが鷗外の基本的な考え方だったのではないかと思います。

僕がそのように考えるきっかけとなった、「魔睡」という小説があります。魔睡とは催眠術のことなのですが、主人公の妻が病院で催眠術をかけられて、知らないうちに性的な行為をされたのではないかと、という話で、自分の意志で抗うことのできない状況での行いなので、罪を問うようがない、というのが鷗外の考え方です。当時はまだ姦通罪もありましたが、本人が自己責任で立ち向かえないような状況にあるのなら、それは仕方ないのではないかと考えているのです。

「山椒大夫」も同様で、原作では厨子王が

段々わかってきたのは、「反自己責任論」が通底しているということ。これは、ある意味、鷗外を物足りなく感じる人もいる原因かもしれませんが。ヒロイックに現実を切り拓いて問題を解決していく主人公ではなく、歴史的な事情や偶然、無意識などによって翻弄される人物たちの事情をずっと書いている。運命への不可抗力を作品に感じるようになってから、急にさまざまな彼の作品を見通せるようになりました。鷗外は自然科学の研究者でもあったので、彼の短編にはその見地も生きています。実験のように、ある条件を定めて、その過程の中で人はどういうことになるか、ということを考えていたのではないかと思います。

――鷗外は社会なり因習なりの環境設定をして、人間がそのどうしようもない状況の中で右往左往する様子を書いていく、ということですね。

鷗外は子どもが悪いことをしたときも頭ごなしに叱るのではなく、「なぜそうしたのか話を聞かねばならない」と妻に常々言っていたそうです。問題が起こったとき、何が背景にあつてそうせざるを得なかったのかを理解しようとする、いかにも鷗外らしい

捕まえた山椒大夫の首を竹のノコギリで切って復讐を果たすという生々しい勧善懲悪の話です。それを鷗外は厨子王が人身売買禁止の法律を作り、それに従って山椒大夫も奴隷をやめて給料を払うことにした結果、山椒大夫はますます富み栄えたという話に改変しています。

僕は何とも言えない強い印象を受けました。個人の人格的な善悪を小説の中で追求してもしょうがないと鷗外は思っているのです。山椒大夫も人身売買が普通だからしているであつて、法律を定めたら、それに則ってビジネスとしてもっとうまく進めていく。勧善懲悪の痛快さなどはありますが、そのような点こそ、鷗外作品が現代的な問題も含む理由だと思っています。

――鷗外作品の人物像は一つのアイデンティティにとらわれず、周りから規定されている面がありま

すね。そうですね。そして、その鷗外の相対主義には二つの面があつたと思います。一つは、自然科学者としての面。科学者は分野に応じて別の学者の説を援用することは当然ですが、日本では、状況によって別々の

学者の説を支持すると、「自分の考えがない」と批判されたりもしました。それに對して、鷗外は自然科学的に、フエアに物事を判断する力をもっていたと思います。

もう一つは「歴史其儘」の態度にもつながってきませんが、人格的な問題よりも状況的な問題に焦点を当てて作品を書くこととする面。史伝を書く際の、歴史的な資料に表れている、人間が生まれてから死んでいくまでの自然な姿を描こうとする姿勢ですね。特権的に主人公を際立たせようとするわけではなく、淡々と構造や状況を描こうとする考えがあったと思います。

——そうした鷗外の姿勢も自身の創作につながっていますか。

私自身は完全なロスト・ジェネレーション世代なので、反自己責任論者であると思います。エンタメというものはキャラクター偏向になりがちですが、それも一種の自己責任論なのです。どんな困難もキャラクターの超人的な能力で切り開いていくが、そのような能力をもたないキャラクターは不幸になっていく。

しかし、小説はそれではいけないと思っ

ています。ある一人の主人公がどういう運命を辿るかを描くときには、構造的なところからアプローチしないと嘘になってしまう。僕は、最初は鷗外の文体に惹かれたのですが、小説の書き方という意味でもかなり影響を受けたと思います。

ただ、鷗外ほどフラットに作品を書いていたと、現代では読者が面白みを感じられなくて厳しいというのも事実です（笑）。ある程度はキャラクターの輪郭を濃くしないと本を読んでもらえないですから。

「舞姫」をどう読むか

——「舞姫」を学校で読むと、「エリスがかわいそう」「豊太郎はひどい男だ」という感想になりがちですが、あらためて、今の時代に「舞姫」を読む意味は何でしょうか。

「エリスがかわいそう」だということをいちばん強調しているのは、作者の鷗外自身です。だから、作者である鷗外がひどい、と非難する読み方はよくわからないですね。「エリスがかわいそう」という読みは、鷗外の意図とどおりの読みなのに、作者の意図どおりに読んだ人が作者へ反発していると

作家の年譜や作品の系譜、創作時の状況などもふまえて理解するほうがよいでしょう。生徒自身が興味をもってほかの作品を読むことにもつながるはずです。

テキスト論が全盛の時代もありましたが、テキストを重んじて、せっかくな残っている作家の情報に意図的に目を背けるよりも、やはり、作者の意図をふまえて読むほうが文学はおもしろいと僕は思います。特に森鷗外は人物としても興味深い人間ですから、それも併せて読むというのは重要な体験ではないかと思っています。

高校生に読んでほしい鷗外作品

——最後に、高校生に読んでほしい鷗外作品を教えてくださいませんか。

「最後の一句」は短いけれど衝撃的な作品です。本当に考えさせられる話ですね。読み終わった後に議論をたくさんするべき作品です。

また「食堂」などの作品を、大逆事件といった歴史的背景をふまえて読むのも勉強になるでしょう。複雑な社会的背景をふまえて非常に微妙な書き方をしています。そ

ころが、あの作品の妙なところ（笑）。ただ逆に、多くの古典的な作品は現代の読者にはリアリティのない話になりがちなのに、これだけ多くの人が「豊太郎ひどい」とか「エリスがかわいそう」とか、感情を揺さぶられて読んでいてというのはすごいことです。文学作品としての力強さがあります。あれほど難解な文体の作品が、今でも読者の心を動かすんだ、ということの意味こそ、もっと考えるべきだと思います。

文学とは「問い」である

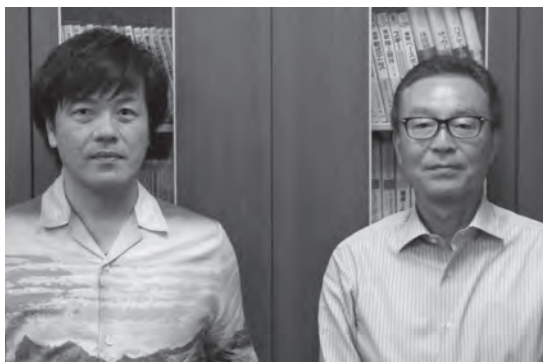
——読者の心を動かすことが、文学の醍醐味の一つですね。

文学とは「問い」なんです。算数のように決まった答えがあるものではない。作品に、もやもやしたのを感じたところから、文学鑑賞も深まっていくのです。

例えば「エリスがかわいそうだ」と思う人には、なぜそう思うのか、それこそ鷗外の執筆意図ではないかと問いかけることが考えられます。また「日本での立身出世に目がくらんだ豊太郎はひどい」という読み方をしている人もいますが、実際には、ひ

の行間を読むのも、文学の醍醐味だと思います。近代文学は、歴史と連動しているからこそのおもしろさがあります。個別の作品のおもしろさだけでなく、社会背景との関係がわかると、もっと文学を楽しめるのではないでしょう。歴史の授業で勉強したことを併せて読む、ということが大事です。

——ありがとうございました。



(2022年8月1日。大修館書店本社にて。)



エッセイ 鷗外と私

大根おろしは汁を棄てず

こいけまさよ
小池昌代

詩人小説家。主な著書に、詩集『コルカタ』『赤牛と質量』、小説『タタド』『弦と響』『たまもの』『かきがら』、エッセイ『黒雲の下で卵をあためる』など。

東京駅・丸の内駅舎は、レトロな赤煉瓦が外壁を飾る。ある日、私は南口改札を抜け、構内のエントランスを横切っていた。見上げると頭上には八角のドーム屋根。床には幾何学模様の大理石が広がる。現在の駅舎は復原されたもので、竣工は今から百数年前、一九一四年（大正三年）のことだった。ここを通るたび、私はなぜか懐かしさを覚えて、離れ難く思うのである。かつて東京にあったかもしれない時代の精神の粉末が、空間に僅か溶け出しながら、行く者たちに束の間の夢を見させるようだ。あ、鷗外！ 鷗外が立っている。私は足を止め、銅像のように立つ鷗外を見た。

「歴史其儘と歴史離れ」のなかで鷗外は書いている。「わたくしの作品は概して dionysisch でなくって、apollonisch なのだ」と。つまり自分の作品は、陶酔的なもの（ディオニソス的）でなく、形式・秩序を指向する、理知的・造形的（アポロンの）なものだとい

う。大正三年の駅舎竣工時、鷗外は五二歳。八年後にはこの世を去るが、三つの史伝など、晩年の最重要作品が書かれるのはこの後のことだ。この年、第一次世界大戦が勃発し、夏には大日本帝国がドイツに宣戦布告。同年初めには東京市に発疹チフスが流行した。

同じ年に発表された「安井夫人」には、発疹チフスならぬ、疱瘡にかかった対照的な兄弟が登場する。兄文治はイケメン、弟仲平はブオトコ。過酷な運命を引き受けるのはもっぱら弟で、疱瘡でも弟の方が重く、大痘痕が残って片目が潰れた。しかし体の弱かった兄が早死にし、弟は江戸へ出て学問を修める。東京がまだ江戸と呼ばれた時代の話。やがて仲平は故郷、日向に帰国、学問所の講師のポストを得るが、その前に嫁取りだと、川添家の姉妹の姉の方に縁談が持ち込まれる。ところが姉の豊は「御亭主にするのは厭」だと拒絶。それを知った妹の佐代が、「あちらで貰うてさへ

下さるなら自分は往きたい」と申し出るのだ。その理由を鷗外は詳らかに書かない。ただその心を、眩しい白球のように作品の宙空に打ち上げる。鷗外の描く女性たちには、「花子」にしる「五百」（「洪江抽斎」にしる「いち」（最後の一句）にしる、逆り出る自

発的な生命のきつ先がある。無私の精神だが自己犠牲の暗さはない。むしろ明るく輝いていて、鷗外が女たちに乗り移り、内側から彼女らを生きているという躍動感がある。個性とか独創を封じ込めている所も鷗外の小説の美しさだろう。表現よりも記述なのだ。「安井夫人」では苦勞多き佐代の一生が事実を記す静けさで描かれた。佐代より先に逝った子も多い。だが一々の感情表現はない。死んだ、亡くなった、自殺した、と記されるのみ。作品末尾には「附録」として、安井一族の生没年が「事実」として列挙された。この干からびた固い事実の地面を、鷗外の、薄情そうでその実、強く温かい眼差しが、耕し、肥沃な「小説」にする。

この作家に創作家としての自我がないわけではないだろう。しかしそれは水面下にぎうと抑え込まれている。抑圧されたエネルギーは反発を秘め、撓みながら作品の底に溜まる。鷗外の読者は、一見、不在の鷗外その人を、忘れて読むことはおそらくできない。「洪江抽斎」

は他者を描いて圧巻だが、事実を積み重ね、最後、人間の大きな生涯の輪郭に触る。一章毎、重みを増す荷車（小説）を、鷗外はごりごりと押し続けた。小説家というより検証者・観照者の態度ではないか。

私は今、「空車」という随想を思い出している。骨格逞しい馬と馬を操る大男が、大いなる空の車を牽く。鷗外は書いている。「わたくしは此空車の行くに逢ふ毎に、目抑へてこれを送ることを禁じ得ない。わたくしは此空車が何物をか載せて行けば好いなどとは、かけても思わない」。緊迫感漂う末尾の文章に、私は訳がわからぬまま、震えだけを貰って慄然とした。空車とは日本国の構造の謂なのか。小説を書くことは、この空車に心や精神を載せ、例えそれが空と知っても、ごりごりと全力で押し続けることに似ていた。少なくともそこに載せるべきは貴人などではないだろう。

この文のタイトルとして私が挙げたのは、「洪江抽斎」に出てくる抽斎の日常スタイルである。「醤油などを掛けなかった」と続く。空車の空を埋めるのは、歴史から漏れ落ちる、こうした日々の習慣ではないか。そこに抽斎の思想、五百の思想、鷗外の精神が雨滴のように光って宿る。鷗外はやはり小説家なのだ。物から離れて精神を語らない。



エッセイ 鷗外と私

西欧語の中の「舞姫」

さわにしゆうてん
澤西祐典

一九八六(昭和六二)年生まれ。小説家、龍谷大学教員。二〇二二年に「フライング」の村で第三回すばる文学賞を受賞。以降「文字の消息」「雨とカラス」などを発表して活躍。近代文学に関する研究も行っている。

「？」

石炭をばはや積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静かにて、熾熱灯の光の晴れがましきもいたづらなり。こよひは夜ごとここに集ひ来る骨牌仲間もホテルに宿りて、船に残れるは余一人のみなれば。

いわずと知れた森鷗外「舞姫」の冒頭だ。主人公、太田豊太郎が帰国の途上、サイゴンの港で、ひとり船内に残って、波乱に満ちたドイツ留学を振りかえる。

高校生の時、私はこの冒頭で盛大に躓いてしまった。理由は三つある。まず、いわゆる擬古文で書かれていたこと。「現代文」の授業で、突然「をばや積み果てつ」と言われて面食らった。続いて、石炭を積んでいるのが「誰」なのか読み取れず(高校生の私は「余」が石炭を積んでいると勘違いした)混乱した。そして、段落の末尾が理由を説明する「のみなれば」という表現で締めくくられるのだが、この文章が船室の様子を描

写した前文にかかることがすつと了解できなかった。

しかし、のちに英訳「舞姫」に触れた時、そんな苦々しい思い出が、所以のない当惑でなかったのだと腑に落ちた。英訳(J. Thomas Rimer 訳“The Dancer”)は次のようにはじまる。

They have finished loading the coal, and the tables here in the second-class saloon stand in silence. Even the bright glare from the electric lights seems wasted, for tonight the group of card players who usually gather here of an evening are staying in a hotel, and I am left alone on board.

私が躓いた部分が、これでもかと論理的に補足されていた。「(はや)積み果てつ」は“have finished loading”

と現在完了形で示され、私が「余」と混同した一文目は主語が“They”と明示されていて、のちにでてくる「I」と区別されている。極めつけは、日本語として違和感のあった「のみなれば」。前文の理由を後ろから説明する接続詞“for”が使われ、(後文が「光の晴れがまし」さ、のみにかかっているか、意見が分かれるとしても)前後関係が一読してわかるようになってくる。誤読しようがない、論理的な文章展開である。

となると気になるのが、鷗外が得意としたドイツ語の訳である。たとえば鷗外が生前、翻訳を許可したドイツ語訳(小池堅治訳)を見てみると、一文目は:Die Kohlen sind schnell geladen.”と受動態で訳されている。この訳書は「独和対比」を謳った叢書のため、その後も、見事なまでの逐語訳となっている。後半の箇所は、理由を示す接続詞“for”にあたる“Denn”が置かれ、文章の関係性も明らかである。鷗外の頭の中に、西欧語の文章構成があったのかもしれない。

そう考えたとき思い出されるのが、鷗外初の単行本『水沫集(美奈和集)』である。「うたかたの記」「舞姫」「文づかい」のドイツ三部作が収められた本書には、クライストやトルストイ、ホフマンスタールなどの翻訳作品も多数収録されている。しかも構成が面白い。

鷗外の創作と創作の間に、四、五作の翻訳作品が配置され、さながらドイツ三部作が泰西の文学作品に支えられるような構成となっている(教科書の「舞姫」より、『水沫集』に収められた「舞姫」の方が居心地がよさそうに見える)。たとえば、ドーデ作「緑葉歎」は、アルジェリア生まれの青年が普仏戦争で負傷し、手当をしてくれたアルザス地方の娘に恋心のようなものを抱くというあらすじだ。青年は故郷に帰って別の女性と結婚するが、アルザスの娘が心の片隅に残っていて……ドイツ三部作と重なるロマンス劇となっている。

『水沫集』に収録された作品群は、文体においても興味深い。「舞姫」などと同じ雅文体で訳出された作品もあれば、アーヴィング「新浦島(リップ・ヴァン・ウィンクル)」のように口語体が採用されている作品もある。附録には鷗外を中心とした文学サークル「新声社」同人による共同訳詩抄「於母影」も載録され、さまざまな文体が試されている。六〇〇頁を越える大著は、さながら世界文学の見本市のようだ。日本近代文学の可能性に満ちた『水沫集』がいつか一冊の本として復刻され、鷗外が「舞姫」を解き放った文学サロンが、現代の読者にも見えるようになることを望んでならない。



エッセイ 鷗外と私

『即興詩人』から広がる文学世界

もり
森まゆみ

一九五四（昭和二九）年生まれ。作家。八四年に地域雑誌『谷中・根津・千駄木』を創刊。二〇〇九年終刊。主な著書に『鷗外の坂』『即興詩人のイタリア』『千駄木の激石』『青鷗の冒険』など。

団子坂上の「鷗外記念本郷図書館」は、鷗外の旧居あとに建った図書館兼記念館だった。私はそこに子どもの頃から入り浸っていた。両親とも空襲にあつており家に本はなかった。読書が昂じて編集者から物書きになり、一九九七年に『鷗外の坂』を書いた。これには一人の女性と一つの坂と一つの作品を絡めて、鷗外の起伏の多い人生を描いた。母峰、恋人エリス、妹喜美子、最初の妻登志子、一時妾であつたせき、二度目の妻しげ……。なかでも妾であつた児玉せきが鷗外邸に至近のところに住み、別れてからもそこに出入りし、その面影が『雁』のお玉と名前も似ているし、容貌の描写がそっくりであることを発見した。

この本を読まれた安野光雅さんから「講談社の『本』の表紙に鷗外訳の『即興詩人』を描くので、文章の方を書きませんか」と誘われた。安野さんは鷗外と同じ津和野の出身である。鷗外は軍医であり、医事評論も

を携えて、私と安野さんはイタリア中を経巡り『即興詩人』のイタリア』を書いた。感じたことは以下である。

1、「羅馬に往きしことある人はピアッツァ・バルベリーニを知りたるべし」から「我等は前に渺茫たる大海を望み、後に琅玕洞の石門の漸く細くゆくを見たり」という最後まで、なんと簡潔で、力強く美しい文語体で書かれていることか。

2、イタリアに行ったことのない鷗外が、どうして眼前にある風景を日本語で活写できるのか、不思議だった。

3、鷗外は欧米の文物を表す日本語も発明した。スカートは裳裾、祭壇は贄卓。異なった文化、宗教、建築物、感情をどう日本語にするか、苦心惨憺した。4、それでもついにやり遂げたのは、歌姫ではなく舞姫であつたエリス、その背後に広がるヨーロッパ世界への、鷗外の関心と愛着があつたからと思う。

希臘の瓶を抜け出て文机の螺鈿の上を舞ふ女かなという歌があるが、最初の離婚後、長い第二の独身時代、鷗外はかつてのドイツの恋人を思いながら、ランプの下で翻訳を進めたのではないか。

『即興詩人』は明治の知識人に愛読され、これを携

書き、芝居も詩も歌も作る。そして膨大な翻訳。それを勉強するために喜んで引き受けた。

教科書で「舞姫」や「高瀬舟」を読んでも、『即興詩人』の翻訳まで読む人は少ない。これにはデンマーク人、ハンス・クリスチャン・アンデルセンが一八三〇年頃イタリアを旅して、自伝的な波瀾万丈のロマンを描いた。鷗外はドイツ滞在中にデンハルトという人の独訳で読み、訳しはじめた。それは『しがらみ草紙』や『めさまし草』に連載、明治三五年に刊行される。

簡単なあらすじを紹介する。声のいい母子家庭の子、アントニオが母を貴族の馬車に轢かれてひとりぼっちになるが、運命のいたずらでリセで学び、親友ベルナルドを得る。二人は同じ歌姫アヌンチャタを恋し、ついには決闘、アントニオはナポリまで逃亡する。そこでアヌンチャタと再会するが、彼女は死の間際だった。まるでイタリア観光ガイドともいふべき、この訳書

えてヨーロッパを旅した人も多い。須賀敦子の父君もその一人で、留学する娘に「即興詩人のあとを訪ねるように」といった。その文学への影響は薄田泣菫、泉鏡花、与謝野晶子、尾崎翠にまで及ぶ。

なかでも明治四〇年、三四歳の与謝野鉄幹を頭に、北原白秋、吉井勇、木下杢太郎、平野万里の五人の若者が、七月の末から八月にかけて、九州を旅したことを特筆したい。その紀行が『五足の靴』である。私はこの旅のあとを追ひ、『五足の靴』をゆく。書いた。

木下杢太郎がゲーテの『イタリア紀行』と鷗外訳『即興詩人』を読んで、ヨーロッパまで行く代わりに、かつてイエズス会が布教し、コレジオが置かれ、天草版の印刷物が発行された天草を目指した旅である。交通事情もあつて、漸くたどり着いた大江天主堂のガルニエ神父とは一時間ばかりしか話していないが、実りは大きい。北原白秋の『邪宗門』、木下杢太郎の『長崎ぶり』『黒船』劇『天草四郎』、そして吉井勇は「命短し恋せよ乙女」と「ゴンドラの唄」に結実させた。

彼らは生涯、鷗外を敬愛し、石川啄木を中心とする『スバル』の編集にも参加した。ぜひ『即興詩人』そして『五足の靴』を読んで、明治の文人がヨーロッパにどう憧れたかを楽しんでほしい。



森鷗外と女性運動

びる まちよしお
美留町義雄

大東文化大学教授

ドイツの女性運動

森鷗外と女性と聞けば、留学時代の恋人エリーゼが想起させられるだろう。特に近年は文豪の〈恋人探し〉が飛躍的に進み、その実情や外見まで明らかにされたので、なおさらである。だが、彼が留学中に、ドイツ女性協会の集会へ赴き、女性運動家たちの講演を熱心に傍聴していた事実は、専門家以外にはあまり知られていない。ドイツにおける女性運動の先駆者、ルイーゼ・オットー＝ペータース (Louise Otto-Peters 一八五〇～一九〇五) が率いるこの女性協会は、一八八五年に創立二十周年を迎え、同年九月にライプツィヒで盛大に総会を催した。当地に滞在していた鷗外は、下宿屋を営む女主人がルイーゼ・オットーの親類であったことから、数百人中わずか十人ほどの男性として総会を訪れ、ひしめく会員たちの熱気を肌で感じたのである。

フェミニズムという言葉などまだ無かった時代であ

る。女性が家を出て社会的な発言をすることは、身の程をわきまえない思い上がりとして痛烈に非難された。そんな中、総会では高名な女権論者が演台に立ち、看護や救貧という活動を通じて社会貢献を目指す旨を語ると同時に、一個の人格としての女性の権利と公正な扱いを強く訴えたのである。演説の後には、賛意を表す万雷の拍手がわき上がった。極東から来た若き森鷗外は、この時期に急発展を遂げつつある女性運動の現場を目の当たりにして、地位の向上と自立を志す女性たちの姿に、大いに感銘を受けたに違いない。

「ドイツ三部作」の女性像

鷗外は、帰国後まもなく、「舞姫」(一八八六)をはじめとするドイツ三部作を著す。彼がそこでドイツの女性たちを主題にしたことは、女性運動が組織的に展開し始めた時代との関連で、あらためて考察されるべきだろう。「文

づかひ」(一八八七)では、貴族の娘イーダが主要人物となり、親の決めた結婚に抗う彼女の姿が描かれている。彼女は「貴族の子に生れたりとして、われも人なり」と主張し、一人の人間として自分の意志を貫こうとする。つまり、彼女は結婚を避けるため家を去り、官女としてザクセン宮廷に赴くのである。従来の研究では、同じく貴族との結婚を強制された(そして破局に至った)鷗外自身の境遇と合わせて論じられることが多かった。しかし、この小説では、やはり女性という立場が焦点化されていることに留意しなければならない。社会的に無力な貴族の女性性が、家を出る唯一のすが宮廷人となることであった。たとえ城中の儀礼的な生が冷たい「塚穴」のようだがとしても、イーダは自分で下したこの決断に殉じたのである。

「うたかたの記」(一八八七)では、美術のモデルとして生計を立てるマリイが登場する。美貌の中に激しい情熱を抱え持つ彼女は、怠惰な画学生たちを辛辣に罵ったかと思うと、留学生の巨勢との再会を手放しで喜び、衝動のままに彼の頭をかき抱く。雷雨から逃れ、深い森の中でロマンチックに愛し合う二人の姿には、これまでドイツ浪漫派の影響が指摘されてきた。だが、終始巨勢をリードし翻弄するマリイの魅力、さらに、彼女の「いまを生

きる」享樂的な自己肯定と、「あやしき少女」や「狂人」とまで評される強い個性は、この時代に目覚め始めた女性たちの自我との関連抜きには考えられない。

「舞姫」においても、豊太郎とエリスの関係に目を奪われがちだが、下層の女性を取り巻く厳しい現実が、社会的な問題意識とともに描き込まれている。エリスは、場末の踊り子であり、昼も夜も座長に酷使される日々を送っている。踊り子仲間の中には、貧しさのあまり娼婦に身を落とす者も多いという。そして、父という庇護者を失うや、エリスも身を売る決断を迫られるようになる。このように、太田と出会う前のエリスの困窮が、ベルリンの貧民窟の詳細な描写とともに浮き彫りにされているのである。そしてまさに、近代社会の底辺のこうした女性の境遇こそ、ドイツ女性協会が救貧活動において取り組んだ問題であり、鷗外が臨んだ総会の諸演説で、くり返し提起された事案に他ならなかった。

「さへづり」と「最後の一句」

ただし、ドイツ女性史の観点から見ると、鷗外が訪れた頃の女性運動は、ルイーゼ・オットーが礎を築いた〈第一期〉と呼ばれており、その段階では、女性協会は富裕な市民層による穏健な慈善団体に過ぎなかった。だが二

十世紀に入るや、女性運動は、同じ社会的弱者である労働者の運動と結びつき、次第に政治性を帯びて先鋭化することとなる。その際、特に争点となったのは、女性の参政権の問題であった。

帰国後も熱心にドイツの新聞を購読していた鷗外は、欧米のこうした動向を見逃さない。「さへづり」(一九二二)は、洋行帰りの百合子が、友人の梅子に、欧州の流行について語る対話風の小品である。服装や装飾などをめぐる、鳥の(「さえずり」)にも似た他愛もない女子のお喋りであり、これまであまり分析の対象とされなかった。しかし、その仮装に騙されてはならない。二人の話題は、次第に無神論や革命など当代の思想に及び、「Suffragettesの騒ぎ」や「Hyde Parkの示威運動」、つまり英国の女性社会政治同盟による急進的な女性参政権運動にまで至る。百合子は、この運動に関して、「丸つ切り無理な要求だとも云へないのよ」と一定の理解を示し、さらに、ノルウェーでは事実上女性が選挙権を得ており「そんな風だから、女はなかなかしつかりして」いるなど、見方によってはこの問題に関する日本の後進性を煽るような発言まで飛び出すのである。

「最後の一句」(一九二五)というテクストも、こうした文脈の中でとらえ直すと、その問題性がより顕著となるだ

学であったことはあまり知られていない。十九世紀中頃、政治的発言が許されていなかったドイツの女性たちは、必然的にまず創作活動において自己表現の場を見出した。それから半世紀後、日本の女性運動の嚆矢といえる『青鞥』(一九二二)が、文芸誌として出発しているのも、こうした傾向において理解できる。そして、創作の筆を執り始めた日本の女性たちを陰ながら支援したのが、鷗外その人であった。平塚らいてうは、後年、「鷗外先生は『青鞥』社の運動に対して、又わたくしに対して最初から深い関心をもたれ、いつも同情的に見ていて下さいました」(『鷗外夫妻と青鞥』・『文芸』(一九二六年六月)と回顧している。官職にあった鷗外は、表立って女性運動と関わることはなかったが、こと文芸に関しては、らいてうも述べているように、早期より女流作家に注目し、その活動に好意的に接していた。

鷗外が樋口一葉の才能を見出し、高く評価したことはよく知られている。彼は、「たけくらべ」(一九二六)を読み、「われは縦令世の人に一葉崇拜の嘲を受けんまでも、此人にまことの詩人といふ称をおくることを惜しまざるなり」(「めさまし草」(一九二六年四月)と最大の賛辞を贈った。生活苦の中、文業で食べていくことを切に願っていた一葉は、鷗外のこの言葉によって、大いに励まされ、力付け

ろう。江戸期に流布した孝行話、すなわち、父親の身代わりになって自ら死罪を請願する長女いちの行為を、鷗外は、「献身の中に潜む反抗」の物語として書きかえた。つまり、「お上の事には間違はございますまいから」という有名な一言には、権威に臆せず物申す少女の強い意志が込められたのである。その点に関しては、軍医官として長年仕えた鷗外の辞任問題が取り沙汰され、キャリアの末期に際して、官僚機構に対する彼のパトスが抑え難く表出していると解釈されたこともあった。しかし、ここで注目すべきは、鷗外が、イエという制度の中で成立した孝行話から、いちという自律的な個性を切り離してみせたことなのだ。するとこれまで孝女であった存在は、「変な小娘」や「情の剛い娘」、さらには「生先の恐ろしいもの」と変容を遂げる。時あたかも青鞥社が世間の耳目を集めていた頃である。いちが顔を上げて「刃のやうに鋭い」一句を役人たちに発したように、(新しい女)たちが、次第に自己を主張し始め、男性中心の旧体制を揺るがそうとしていた。

■女流文学者たちへの後押し

ルイーゼ・オットーに関しては、女性解放運動における活躍が取り上げられるあまり、彼女の出発点が実は文

られたに違いない。

尾竹一枝が青鞥社から別れ、雑誌『番紅花』(サフラン)を創刊した際、鷗外は、自ら小品「サフラン」(一九二四)を書いて尾竹に捧げてもいる。自室のサフランに関連させたメッセージ、つまり、「物の生ずる力は驚くべきものである。あらゆる抵抗に打ち勝つて生じ、伸びる」という彼の言葉は、旺盛に枝分かれして展開する女流文学、ひいては、逆境の中で力強く成長する女性運動全般の未来を示唆し、エールを送るものでもある。

鷗外はなぜこれらの女性たちを援助したのだろうか。社会的公正というイズムに駆られたわけではあるまい。おそらく彼は、創作という場では男や女の区別は無用と考えていたのだろう。鷗外が「ノラ」(一九二三)と題して翻訳したイブセンの「人形の家」は、自立する(新しい女)の代名詞となった。翻訳版では鷗外の「解題」が付されており、そこにはノルウェーの女性協会におけるイブセンの演説が紹介されている。それによると、イブセンは、意識的に女性問題のために働いたのではなく、ただ「女子の事を、人類の問題として取り扱ったに過ぎない」と述べたという。鷗外がこの言葉を抜粋した意義は深い。彼もまた、性別を超えた「人類」的視座で、女性たちの文芸活動を見守っていたに違いない。



森鷗外の漢詩をめぐって

——日本の言語文化に関する一考察

古田島洋介

明星大学教授

日本の言語文化史上、現代は未曾有の例外時期である。一級の知識人ですら漢詩文の素養をほとんど失ったからだ。古来「漢」と「和」の両輪で進んできた日本の言語文化から「漢」の車輪が外れてしまったのである。大きく傾いて転覆したとて、わざわざ驚いてみせるには値しまい。

もしかすると、右の「現代」は「近現代」とすべきではないか、との声が挙がるかもしれない。たしかに高校生用の『日本文学史』の類には、漢詩文について「近代以降は全く衰退した」などと記すものもある。しかし、これは紛う方なき事実誤認だ。たとえば狭義の漢文（散文）が衰えたことは認めるとしても、漢詩（韻文）は明治維新以後も隆盛を極め、森春濤（1819-89）・槐南（1863-1911）父子や国分青涯（1857-1944）などの職業漢詩人が活躍し、政治家・官僚・学者・軍人・医者などにも漢詩の作り手が多かった。

漢詩が盛んに作られたのは、微に入り細を穿つ散文よりも、要所を点じて余情を醸す漢詩のほうが、和歌・俳諧で培われた日本人の好尚に合っていたからかもしれない。実際の制作に際しても、漢詩は、句式・平仄・押韻などの規則に従いつつ、ほぼパズル感覚で創作できる。消閑の具としても役立つ知的遊戯であった。もし絶句では飽き足らず、時間や知力に余裕ありとなれば、対句に凝って律詩に仕立てるような融通も利く。

軍医・作家として活躍した森鷗外（1862-1922）も、そのような漢詩作者の一人であった。鷗外の文業は、決して『舞姫』その他の小説や『即興詩人』などの翻訳に限られたものではない。現在、確認できるだけでも二〇〇首を超える漢詩を遺している。鷗外とともに明治の文豪として併称される夏目漱石（1867-1916）もやはり二〇〇首以上の漢詩を詠じた。作家活動のかたわら漢詩を作った点で、また、その首数が二〇〇以上に及んだ点で、二

人は相似た側面を持ち合わせていたのである。江戸時代以来の「学問と言えは漢学」の雰囲気がおも濃厚な雰囲気の中で育った二人にとって、漢詩は身近なこのうえない韻文形式であった。鷗外におけるドイツ語・ドイツ文学も、そして漱石における英語・英文学も、ともに漢詩文の素養を基盤としていたのである。

ただし、漱石の漢詩が多く漱石個人の内面を吐露するような私的性格を備えているのに対し、鷗外の漢詩には他者との応酬・贈答が目立ち、時として公的な性質さえ帯びる場合がある。また、漱石が動もすると漢詩の規則を踏み外して破格に及ぶこともあるのに対し、鷗外はあくまで漢詩の規則に忠実であろうとし、典拠のない語句を作中に紛れ込ませるような蛮勇は奮わない。さらに、漱石においては殊に最晩年の『明暗』執筆時に数多く創作した難澁を極める七言律詩が全詩数の三八%にも達するのに対し、鷗外の七言律詩は首数にして漱石の四分の一にも満たず、最も容易に制作できる七言絶句が全詩数の約七〇%を占める。結果として、漱石漢詩に比べると、鷗外漢詩が総じてこぢんまりした印象を与えることは否めない。しかし、だからといって、鷗外の漢詩は面白くないのかと言えば、また話は別である。

日本の漢詩界では江戸後期～明治期に竹枝詞が流行

した。竹枝詞とは漢詩の分類における楽府の一種で、〔唐〕劉禹錫（772-842）に始まったとされる。ある土地の風物・風俗・男女の恋情などを詠じた詩で、一般に通俗的で軽快な民謡調、体裁は七言絶句に準ずるのがふつうだが、平仄の配置は必ずしも厳密でない。日本の主要な竹枝詞を知るには、伊藤信「編輯兼校訂」『日本竹枝詞集』（華陽堂書店1936）が便利だ。上・中・下の三巻に、旧きは寛政九年（1797）から新しきは昭和九年（1934）に至るまで、文化・文政・天保（1861-1868）および明治初年～二十年代（1868-96）を中心として計四〇種の竹枝詞集を収め、総作品数は約一四七〇首にも上る。また、詠じられた土地も北は函館から南は長崎まで日本の津々浦々にわたり、その内容は艷種にも事欠かない。

こうした竹枝詞の流行を念頭に置くと、たとえば鷗外の『航西日記』も一種の海外竹枝詞集と観ることができ。明治十七年（1884）八月十月、留学先のドイツに向かつて航行中、船上の無聊を慰める意味もあったのだろう、鷗外は、旅日記の体裁を取って漢文で旅程を記しつつ、外国の景物を漢詩に仕立ててみせた。一例を挙げれば、九月十七日、船が錫蘭島（現スリランカ）に接近した時、鷗外は「近錫蘭島。島英人所領、已而望椰林不知其幾十里也」（錫蘭島に近づく。島は英人の領する所にして、已にして

椰林を望めば其の幾十里なるかを知らざるなり」として、その風景を詠じている。

印度洋波山様大 印度洋の波山様に大にして
飛魚幾隻似飛禽 飛魚幾隻か飛禽に似たり
今宵来近錫蘭島 今宵来たつて近づく錫蘭島
十里青烟椰樹林 十里青烟椰樹の林

このような漢詩は、七言絶句の形式といい、字句に凝らない軽い調子といい、竹枝詞の資格を十分に備えている。単なる叙景詩ではないかと侮るなかれ。当時の海外竹枝詞は、外国の風物を知らしめるべく、今日の風景写真が果たすような役割を担っていたのである。

もともと、鷗外は常に倦むことなく漢詩を詠み続けていたわけではない。明治二十四年(1891)までは毎年それなりの首数を制作していたものの、翌二十五年から大正三年(1914)にかけては寡作に陥り、その間、明治三十年(1897)には談話「今の文学界」で「漢詩は有体には早晩亡びるねエ」とさえ発言している。

しかし、鷗外は大正四年(1919)から本格的に詩作を再開した。その契機をもたらししたのは、無類の漢詩好きであった大正天皇その人である。木下彪『大正天皇御製

——戦地に向けて出発する看護婦たちをお励ましになった御製にほかならない。

この御製に対し、鷗外は左の一首を以て唱和した。部下の軍医で漢詩人の横川徳郎(1888-1929)に修訂を依頼して成った字句である。

奉和聖製詠看護婦 森鷗外
(聖製の看護婦を詠するに和し奉る)
裙釵還有丈夫雄 裙釵も還た有り丈夫の雄
好躡沙場戰血紅 好んで躡めり沙場
応向汗青増故事 応に汗青に向かつて故事を増すべし
玉纖爭奏裏創功 玉纖争つて奏す裏創の功

第一句「裙釵」はも・す・と・かん・ざ・し、女性を指す。第三句「汗青」は歴史書。第四句「玉纖」は女性の白く細い指。「裏創」は傷口に包帯を巻くこと、傷の手当て。一見してわかるように、鷗外の漢詩は御製に見える韻字「雄・紅・功」をそのまま同じ位置に用いた次韻の作である。今からわずか百余年前、君臣の間でこのような漢詩の応酬が行われていたのだ。隔世の感と称して懐旧の情に浸るには、あまりに近すぎはしまいか。

詩集謹解』(明徳出版社1960/再版2000)によれば、大正天皇は確認できるだけでも一三六七首の漢詩をお詠みになったという。その漢詩の御愛好ぶりは尋常ではない。天皇から漢詩を差し出すように命じられて応制の一首を制作した大正四年以降、鷗外漢詩は陰に陽に大正天皇とともにあったと断じて過言ではなからう。大正天皇との関わり——これが後期の鷗外漢詩を特徴づける顕著な公的性格である。論より証拠、大正天皇と鷗外との漢詩の応酬を見てみよう。御製は、大正三年(1918)、時の欧州大戦すなわち第一次世界大戦に際して、日本赤十字社が看護婦を海外派遣した一件を詠ずる。今日に謂う国際貢献活動の一環だ。字句は鷗外の大正四年『日記』六月十五日条に拠る。

看護婦(看護婦) 大正天皇
白衣婦女氣方雄 白衣の婦女氣方に雄にして
佩得徽章十字紅 佩び得たり徽章十字の紅
一意療創尽心力 一意創を療し心力を尽くせ
回生不讓戰場功 回生譲らじ戦場の功に

第四句「回生」は命を助けること。「負傷者の命を救うことは、戦場での勲功に優るとも劣らぬ手柄である」

あるいは「もはや漢詩文の時代ではない。英語の時代だ」と言うかもしれない。しかし、漢詩文の素養がほぼ消え去った今でも、「唐」孟浩然「春曉」の「春眠 曉を覚えず」や「唐」杜甫「春望」の「国破れて山河在り」は誰でも聞き覚えがあり、必要とあらば口をついて出る詩句だろう。むしろ、高校の教室で習ったことがあるからだ。そもそも我々は、先人たちが考案・発展・洗練させてきた漢文訓読という離れ業のお蔭で、一千数百年前の中国古典詩を原文に即しつつ日本語で発音・記憶できる僥倖に恵まれているのである。

それに引き換え、日本人の脳裡に共通して存在する英語の詩句があるだろうか。確実に諧謔できる英語となれば、例の“To be, or not to be, that is the question.”(生るべきか死ぬべきか、それが問題だ/Shakespeare, Hamlet, act 3, sc. 1)くらいが関の山ではないのか。この独白が明治七年(1874) The Japan Punch 誌上で「あります、ありません、あれは何ですか」(笑)と戯訳されて以来、時を経ること一世紀半、日本の英語学習は長足の進歩を遂げた。とはいえ、それでもなお、ある英詩の一句を日本人が異口同音に発する域には達していないのである。



「舞姫」を読み直す

——比較読みによるアプローチ——

山口 徹 やまぐち とおる

相模女子大学

■教材としての鷗外作品

「舞姫」は、長らく高校小説教材の定番とされてきた教材ですが、この時期の鷗外独自の雅文体の読みづらさ、後味の悪い物語の展開、かけ離れてしまった時代感覚などの問題があるために、現今、高校の授業で扱うのは難しいという印象が定着しているようです。一方、中学校では「高瀬舟」(二九六)や「最後の一句」(二九五)といった歴史小説が再び採録されています。中学の時点で、江戸時代が舞台となった歴史小説をそれなりに読むことができたにもかかわらず、高校の後半で同じ著者が現代を描いた小説がきわめて読みづらいものとして立ちふさがってくる、そんな経験を鷗外の教材は「国語」の学習者に与えてきたのかもしれない。もちろんそのねじれの原因は、それぞれの成立年代の違いにあるわけです。

鷗外が歴史小説を書き始めたのは乃木希典夫妻の殉死に触発されたこと、つまり大正期に入ってからという

ことになります。一方、「舞姫」が世に問われたのは明治二十年代前半、ちょうど二葉亭四迷らによる言文一致の初期の試みが続けられている時期のことでした。それから約二十年が過ぎて鷗外がふたたび小説を集中的に書きはじめて以降、たとえ江戸時代を舞台にしても、現代の中学生でもじゅうぶん読むことのできる文体へと変化していったわけです。私たちの「国語」に生じた歴史的变化の一例を同一著者の作品の比較を通じて具体的に知り得るという点が、鷗外教材の類を見ない価値のひとつと言えるでしょう。

■「舞姫」と「じいさんばあさん」を比較する

さて、「舞姫」の文体に触れ、現代日本語への変遷過程について知ることだけでも一定の意味があるかもしれませんが、できればその内容を深く読み進め、人生や社会に横たわる様々な問題について学習者がそれぞれ考え

を及ぼす地点にまで導きたいところです。その一例を、やはりこれまで高校教科書に採録されたこともある鷗外の歴史小説「じいさんばあさん」(一九一五)との比較

読みによって紹介したいと思います。この小篇は、鷗外歴史小説の中でも珠玉の作と評価されてきたもので、「最後の一句」と同じく江戸時代の文人太田南畝(蜀山人)による巨大なゴシップ集『一話一言』(全三巻)から題材を得ています。枯れた筆で理想的な老後を描いた佳作とされてきましたが、意外なことに「舞姫」とよく似たポイントをもつ作品となっています。かたやドイツ近代を舞台とした若者たちの、かたや日本の江戸時代の老夫婦の物語と、表面的にはまったく異なる二作品を取り結ぶのは、物語の構成と展開、登場人物設定、状況(出張・妊娠・離別)の類似などです。

「じいさんばあさん」の構成は現在↓過去↓現在となっており、「舞姫」と同じく現在から過去を回想する形になっています。ただし、「舞姫」が太田豊太郎による一人称の語りであったのに対して、「じいさんばあさん」は三人称の語りを採用しています。このことは、自分の行為を悔やみ、それを露わに語る行為をした豊太郎とは異なり、起こった出来事を客観的に捉える語りであることを可能にしています。

次に指摘したいのはストーリー展開と登場人物の設定、直面する状況の類似です。

○「舞姫」豊太郎のロシア行・エリスの妊娠
・「まことの我」に目覚めていたはずの豊太郎が、生まれつきの「所動的、器械的」自我へと戻ってしまふ
・その後の二人の別れを決定づける

↓ お腹の子供と豊太郎が会うことはない
○「じいさんばあさん」伊織の二条城行・臨月の妻人
・結婚後は全くおさめていたはずの「肝癰持ちと云う病」を爆発させて刃傷沙汰を起こす
・二人は長く引き離されることになる

↓ 子供は幼くして死に、伊織と会うことはない
さて、上述した「じいさんばあさん」の該当箇所とこれに対応する原典「美濃部伊織伝并留武始末書付」の叙述は以下のようになっています。

伊織が妻を娶ってから四年立って、明和八年に松平石見守が二条在番の事になった。(中略)伊織は、丁度妊娠して臨月になっているるんを江戸に残して、明和八年四月に京都へ立った。

明和八年四月嫡男平内出生仕候。同月伊織儀二条為在番罷登候。

注目したいことは、典拠資料には「妊娠」「臨月」の語がないことです。またこの部分は本来、「明和八年四月に長男の平内が生まれ、その同じ月に伊織が二条城の勤めのために京都に登った」と読むべきところですが、ところが鷗外は、この順番をわざわざ逆にして、「丁度妊娠して臨月になっているるんを江戸に残して」伊織を京都に旅立たせています。また、鷗外は「父の顔を見ることの出来なかつた嫡子平内」という原典にはない表現をわざわざ用いて伊織が妊娠中のるんとお腹の子供を残して別れたという変更を補強しています。このように、エリスとるん、二人の女性主人公の妊娠を軸として、男性主人公の置かれた状況や行動、周囲の人物に対する関係性など「舞姫」の核となる枠組みが「じいさんばあさん」に移植されていることを確認できます。しかしながら「じいさんばあさん」は、若い男女の行き止まりの悲劇で閉じられた「舞姫」とはまったく異なる結末、艱難を乗り越えた老後の男女のおだやかなあり方へと到達していくこととなります。そこにいかなる要因があるのか。決定的な違いが女性主人公の対照的な描かれ方に表れていることがわかります。「彼は優れて美なり。乳のごとき色の顔は灯火に映じて微紅を潮したり。手足のかばそくたをやかなるは、貧家の女に似ず」と描かれたエリス

に限らず、過ぎ去った昔の夢の迹を辿るのであらうと察した。

このように老後が描かれたるんと伊織の様子は、職を解かれてから愛を育んでいく太田豊太郎とエリスの関係想起させるものです。語りの性質・物語の形式、登場人物の年齢・特色に違いはあるものの、二作品に物語の展開・要素・主要な人物配置においてよく似た特徴を確認してることができました。このときはじめて、鷗外はなにゆえ龐大な原典の中からこのトピックに着目し、「過ぎ去った昔の夢の迹を辿る」老後のふたりを描く小説としてリメイクしたのか、なぜ伊織は息子の生まれた後でなく、生まれる前に旅立たなくてはならなくなったのか（より本質的にはなぜ妊娠中の女性を置き去りにされる展開にしたのか）といった問題を問い直すことが可能となるでしょう。そしてその答えは、太田豊太郎が故郷と栄達への道に繋がるポジションへ復帰するためエリスを捨て去ったときに破滅した愛の、選択されなかつた可能性の継統としてあるように思えます。「舞姫」の二十五年後に書かれた歴史小説「じいさんばあさん」とは、かつてどん詰まりの悲劇のうちに取り残してしまつた存在を救おうとした作者鷗外によって語りなおされたもうひとつの「舞姫」なのです。

は「終日兀坐する我が読書の窓下」を飾る「二輪の名花」として造形されていましたが、一方のるんは「美人と云う性の女ではない。若し床の間の置物のような物を美人としたら、るんは調法に出来た器具のような物であろう。体格が良く、押出しが立派で、それで目から鼻へ技けるように賢く、いつでもぼんやりして手を明けて居ると云うことがない」と描かれることで、エリスとは逐一反対となるよう綿密に造形されたことが確認できるはずですが。

このほかにもふたりの対照性は随所に見ていくことができますが、重要な違いは、エリスが豊太郎との別れに際して「精神の作用」を廃した「生ける屍」としてテキストから葬り去られたのに対し、るんの場合、伊織と別れてからの、その後が描かれたという点にあるでしょう。

二人の生活はいかにも隠居らしい気楽な生活である。爺いさんは眼鏡を掛けて本を読む。細字で日記を附ける。毎日同じ時刻に刀剣に打粉を打って拭く。体を極めて木刀を揮る。婆あさんは例のまま事の真似をして、其隙には爺いさんの傍に來て団扇であおぐ。もう時候がそろ／＼暑くなる頃だからである。婆あさんが暫くあおぐうちに、爺いさんは読みさした本を置いて話をし出す。二人はささも楽しそうに話すのである。（中略）近所のものは、二人が出歩くのは、最初の其日

■「舞姫」を読み直す

以上、高校教材のなかでもとりわけ難解で、内容において拒絶反応が生じがちな「舞姫」を、江戸時代を舞台としながらも平易な現代語で書かれた「じいさんばあさん」と比較するアプローチを紹介してきました。ふたつの小説にはいずれも現代の感覚にそぐわない面がありますが、比較考察を通じて、それぞれの生徒の問題意識の育成といったことにもつながるのではないのでしょうか。また、このとき、「舞姫」の太田豊太郎の語りが己を責めぬいたものであることに気づき、これが一人の青年の罪の「告白」の物語ではなく、二人の人間の自由な結びつきを国家や家の論理によって引き離すことがいかに残酷な結果をもたらすものであるかを「告発」する物語であることに気づくといった視野が開けるかもしれません。私たち現代の読者が疑念を抱くべきなのは、愛かそれとも汚名返上に結びつく復讐に惑う豊太郎の倫理に對してである前に、そもそもその両立を無条件に許さずにいづれかの選択を強いる、当時の慣習法に對してであるべきではないでしょうか。豊太郎が恩人相沢に抱く一点の恨みとは、彼の懺悔の外側にある（制度）に向けられているのです。

※ここで紹介する論の詳細は『国語教育』とテキスト論（ひつじ書房、二〇〇九）所収の拙論を参照いただきたい。引用に際し原文の一部は改めた。



歴史小説から「歴史そのままと歴史離れ」を読み深める

はつがい かずゆき
初谷和行

武蔵野大学准教授

■はじめに

新しい学習指導要領の新科目は「現代の国語」「論理国語」「国語表現」からなる実用・論理系と、「言語文化」「文学国語」「古典探究」からなる言語文化系科目の二系統に分かれています。これまでの科目では評論も小説も「現代文」として扱われていたことをふまえると、評論と小説が科目で分かれていることに戸惑う先生方も多いのではないでしょうか。また、昨今の大学入試共通テストでは、評論を読んで小説の読解・解釈を問うような問題も見られます。

そのようなことも視野に入れて、本稿では『論理国語』（大修館書店・論国706）に掲載されている森鷗外の「歴史そのままと歴史離れ」について、鷗外の歴史小説を通じて読み深めていく試行的単元を紹介したいと思います。

とができそうです。このような想定をする際には、「山椒大夫」とその典拠とを比較していくことが必要になると思われます。「歴史そのままと歴史離れ」教科書掲載部分にも典拠からの変更部分に関する言及がありますが、実際に「山椒大夫」とその典拠を見ながら詳しく比較していくことも考えられます。なお、鷗外の「山椒大夫」の具体的な典拠は明らかではないですが、少なくとも説話「さんせう太夫」のおおよそのストーリーとの差異を比較することはできるでしょう。

一方、「歴史そのままと歴史離れ」に「わたくしは『自然』を変更することを嫌って、知らず識らず歴史に縛られた」とあることから伺えるように、一連の歴史小説の系譜は何をどのように語るかということに関する鷗外の試行錯誤の過程であるとも考えられます。それをふまえると、大きめの単元になるかもしれませんが、「山椒大夫」だけでなくいくつかの歴史小説をふまえて「歴史そのままと歴史離れ」における「歴史そのままと歴史離れ」について解釈させることも考えられるでしょう。

どちらにしても「歴史そのままと歴史離れ」に関する解釈をもとに最終的には、「わたくしは歴史の『自然』を変更することを嫌って、知らず識らず歴史に縛ら

■単元の概要

（一）教材の特徴と学習の方向性

「歴史そのままと歴史離れ」は、その文章中で話題にしている「山椒大夫」と同時期の一九一五（大正四）年に書かれました。鷗外は「興津弥五右衛門の遺書」一九一二（大正元）年を皮切りに「阿部一族」（大正二）、「大塩平八郎」（大正三年）、「最後の一句」（大正四）「高瀬舟」（大正五）などの、いわゆる歴史小説をその晩年に書いています。ちなみに『文学国語』（文国704）掲載の「舞姫」は一八九〇（明治二三）年初出で初期の代表作です。

「歴史そのままと歴史離れ」が「山椒大夫」と同時期に書かれたことや、省略がなされている教科書掲載部分にも「山椒大夫」の部分が残っていることをふまえると、「山椒大夫」の作品をもとにしながら「歴史そのままと歴史離れ」における「歴史そのままと歴史離れ」とはどのようなものを解釈させるような授業を想定するこ

れた。わたくしはこの縛りの下に喘ぎ苦んだ。そしてこれを脱せようと思った。」と述べているその苦悩について考えさせたいところです。

（二）単元の計画

次に、先ほどの流れをふまえた単元計画について紹介したいと思います。今回は、（一）で述べた両方の方向性を含む単元をイメージしてみます。

○単元を通じた学習課題

・「わたくしは歴史の『自然』を変更することを嫌って、知らず識らず歴史に縛られた。わたくしはこの縛りの下に喘ぎ苦んだ。そしてこれを脱せようと思った。」という言葉の意味を解説しなさい。

○単元の評価規準

・文章の種類をふまえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉えている。
（B「読むこと」A）
・関連する文章や資料を基に、書き手の立場や目的を考えながら、内容の解釈を深めている。
（B「読むこと」オ）

○単元の学習展開

①第一時（第一次）

まずは「歴史そのままと歴史離れ」の教科書掲載文章のみを対象として考えさせます。具体的にはまず、主に文章前半から「歴史そのままと歴史離れ」あるいは「自然」とはどのような意味なのかを考えさせます。そして次に、文章中盤から後半に書かれている「山椒大夫」をめぐる説明内容から、「歴史離れ」あるいは「これを脱せようと思った」の内容について考えさせます。

②第二時・第三時（第二次）

次に第二次として、歴史小説を読んでききます。まずは「これを脱せようと思つて書いた作品である『山椒大夫』」を読みます。その上で、説話「さんせう太夫」のあらすじを参照し、主に内容（物語設定、場面、筋）の点から典拠との違いについて挙げさせます。「歴史そのままと歴史離れ」で鷗外が挙げている変更点は表現の仕方と物語設定に関わることで、更に場面設定や筋の違いにも焦点をあてたいところです。「山椒大夫」は授業で読んでいくにはそれなりの長さがありますので、一部を読ませてその前後はあらずで補うというように工夫をしてもよいでしょう。「羅生門」と「羅城門登上層見死人盗人語」（『今昔物語集』）の比較や、「山月記」と

「人虎伝」の比較と同じようなイメージで授業を展開していきます。

③第四時・第五時（第二次）

さらに、別の歴史小説を読んでききます。「山椒大夫」は「これを脱せようと思つて書いたものとしての位置付けでしたが、今度は「わたくしは歴史の『自然』」を変更することを嫌って、知らず識らず歴史に縛られた」ことに位置付く作品として「山椒大夫」以前のものを読みます。例えば歴史小説の第一作である「興津弥五右衛門の遺書」、あるいはそれに続く「阿部一族」、あるいは「護持院原の敵討」などが考えられます。先の「山椒大夫」と同様、典拠となるエピソードも念頭に置きながら典拠と作品の内容面（物語設定、場面、筋）での比較をしたり、表現の仕方（例えば「興津弥五右衛門の遺書」での人物の内面描写の少なさ）についても捉えさせてみましょう。授業で扱うには長い作品が含まれますので、先の「山椒大夫」と同様に、一部を読ませてその前後はあらずで補うというように工夫をしてもよいでしょう。また、ジグソー法におけるエキスパート活動のようなイメージで、グループごとに担当作品を分けることも考えられます。その場合、次の第三次でジグソー活動（とクロストーク）をするようなイメージで展開していきます。

④第六時（第三次）

第一次、二次をふまえ、「歴史そのままと歴史離れ」に関する学習課題への結論を検討していきます。その検討の展開イメージとしては次の通りです。

a 「山椒大夫」以前の作品である「興津弥五右衛門の遺書」、「阿部一族」、「護持院原の敵討」といった作品の、内容面、表現面の比較検討を行い、「わたくしは歴史の『自然』」を変更することを嫌って、知らず識らず歴史に縛られた。わたくしはこの縛りの下に喘ぎ苦んだ。」ことの内実を検討します。（歴史の「自然」とは内容面・表現面のどのようなことを指すのか、「歴史に縛られた」とは内容面・表現面のどのようなことを指すのか）

b 「山椒大夫」の内容・表現の検討から、「そしてこれを脱せようと思つた。」の内実を検討します。

c 両者を組み合わせて課題に関して説明をします。「興津弥五右衛門の遺書」など、「山椒大夫」以前の歴史小説群の描き方の意図は何か、そしてそのような描き方への「縛り」によってどのような障害が生じたのか、その障害を乗り越えるべく「山椒大夫」では何を意図してどのように描こうとしたのかといったことを考え、表現させます。

右記のa bは、一緒くたに展開していくことも想定されますが、a bのような両面を含みながら考えていくということを学習者に示しておくことは、検討のしやすさという点で重要かと思います。

■おわりに

ここでは歴史小説の比較を中心に行いましたが、歴史小説以外の作品（例えば『文学国語』（文国刊）でも扱われている「舞姫」など）を通じて「自然」について考察するといった学習も考えられるでしょう。その際は、先に述べたように作品の系譜などをふまえることが大切です。

また、例えば「舞姫」では、別々の立場や状況にあった豊太郎とエリスとの出会いによって物語が動いていきます。このように文学作品は人間や社会の姿を描きますので、その描かれた内容に関係する様々な学問分野（例えば社会学・哲学など）とも隣接しています。論説文や文学作品といった垣根を超えたり往還したりしながら、社会や人間について考えることで、結果として国語科として養うべき資質・能力が効果的に養われるということもあるのではないかと思います。



新任教員による 通信制高校での「舞姫」導入

野口 優太
のぐちゆうた

麗澤高等学校通信制

■はじめに

今回、書かせていただいたのは授業案というより生徒へのアプローチの仕方というほうが正しいかもしれません。幅広い学力の生徒に楽しんでもらえるような仕掛けを私なりに考えてみましたので、「最近の新任教員はこんなことを考えてるんだ。」という温かな気持ちで読んでいただけると嬉しいです。

「石炭をばはや積み果てつ。」

はじめて「舞姫」を手にとったときはこの一文で挫折したのを覚えています。ちょうど、高校生の頃でした。下の文に目をやっても、同じ日本語とは思えないような難しい言葉の数々が並んでいて、それ以来「舞姫」＝石炭を積み難い話というイメージが定着していました。再び、この本を手にとったのは教員一年目の今年のことで。数年ぶりに読みましたが、国語教員になった今

でも原文はよくわからないし、つまらなかつたというのが正直な感想です。それもそのはず。誇れることではありませんが、擬古文で書かれているような本はほとんど読んだことがありません。いつも読むのは大衆小説やライトノベルばかりで純文学は有名な作品をいくつかかじっている程度です。私の国語力が不足しているからというのは、もつともな話ですが、生徒たちも同じような気持ちを抱いていると思います。

内容を理解できたのは現代語訳の本を何冊か読んでからのことです。読んでみると、まあ面白い。どんなに面白い作品も、言葉の意味がわからなければ何も分かりません。もちろん原文を読むことも大切かもしれませんが、ですが、内容を理解し、作品を楽しむという観点では、はじめから現代語訳を読んでもみるのもありなのではと思います。

あれほど苦手意識を抱いていた「舞姫」ですが、今で

は一日に一回は必ず読むくらい、ハマっています。訳者によって解釈が異なる場面もあるので、それもまた読んでいて面白いところです。同じ料理を作るのでも、作り手によって味付けが違うみたいな感覚かもしれません。

内容を短くまとめると、「身分も何もかもが違う若い男女の許されざる恋。主人公の免官、母の死という二つの悲劇をきっかけに狂っていく二人の関係。愛か出世かという究極の選択に迫られる話」とでもいいかもしれません。難しいことは分かりませんが、単純にこの面白い話を生徒たちに知ってほしいと思いました。

■授業について

授業を行うにあたって課題になったのが、どの現代語訳を使うかです。「舞姫」の最も美しいところは、美しくも儂いエリスが段々と壊れていく姿や娼婦に堕ちるしかないという彼女が置かれている状況描写にあると思います。一つの現代語訳だけではこれらを表現するのが難しかったので、いくつかの現代語訳を参考に自分で現代語訳を書きました。教育的な良し悪しはさておき、新課程においては文学国語が新設されるくらいですから、文学の美しさに触れるのもまた学びに繋がるのではないのでしょうか。高校生向けにこの作品についてひとこと言うなら、アングラでエモい感じを楽しんでほしいで

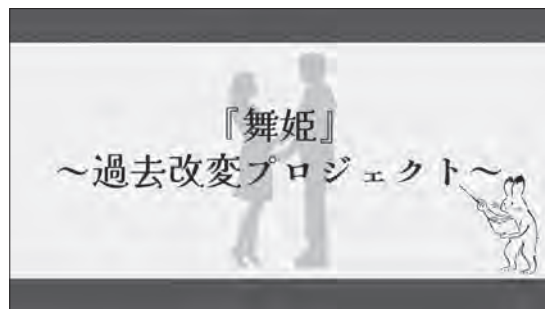
す。たぶん、いつも見ている漫画やアニメと同じ感覚で楽しめると思います。

教員一年目にして感じたのは、生徒が文を読めないことです。読めばきちんとできる生徒もいるのに「読む」までにたどり着かない、「読めない」というのが正解でしょうか。私の世代でも「読む」機会は減る一方で、YouTubeやSNSなど「見る」媒体がほとんどの割合をしめています。ですので、私よりも下の世代ではこういった傾向は顕著だと思っています。

教員としての経験はまだ浅いですが、学生時代にインターンをしていた学校の影響で主体的に考える学習やICTを駆使した課題解決型のプロジェクト授業が私の根幹にあります。

授業設計をする際、最も気を遣うのは、ぱっと見でつまらなそうと判断されないことです。不味いものより美味いものの、美味しいものより美味しそうなもの（映えるもの）に惹かれるのは当然のことです。全日制のように時間割で半ば強制的に参加させることもできませんから、通信制で体系的な授業をやらうとすると初手が肝心になってきます。

そのうえで、どのような授業にするかは非常に悩みました。物語の続きが仮にあるとしましょう。明治中期頃



スライド①『舞姫』過去改変プロジェクト



スライド② キャラクター紹介

最後に
この授業案はあくまで「舞姫」に親しみを持ってもらうための導入に過ぎません。「石炭を積む難しい話というイメージから脱してくれればいいや」程度の軽い気持ちでつくったものですので、これを機にきちんとした現代語訳を読み、さらには原文にもチャレンジしてみたいというのが私の願いです。この授業を通して、授業内だけでなく、ほんの少しの興味からでもよいので、自ら文学に触れてみてほしいと思います。

- ④ あらすじを元に時系列をまとめる。模範解答の時系列もワークシートの中にあるので分らないことがあれば、それを参考に作成する。
- ⑤ 模範解答の時系列、またはグループで作成したものを元にバッドエンドになってしまった理由を考える。どこからが分岐点になっているのかを探す。
- ⑥ ⑤で探した分岐点からどうすれば二人の幸せな未来が開けるかを考える。ある程度、時代背景を考慮するの

- ⑦ 過去改変後のことを考える。改変以降の時系列がどうなるか、また改変することによってどのような問題が生じるかも考えよう。
- ⑧ グループごとに考えた案をプレゼンし、どのグループの改善案がより二人を幸せにできるかを考える。フォーラムで良いと思ったグループを選択し、その理由も書き、共有する。

- ①「舞姫」の過去改変プロジェクトの概要をスライドで説明する。(次ページスライド①②参照)
 - ② グループでワークシートに記載されているあらすじ
- は医療が脆弱な時代ですから、精神病を患ったエリスは母子ともに死んでしまうことが予想されます。豊太郎自身も彼女を裏切り、狂人にしてしまった自分の弱さや数々の過ち、彼女の亡霊に苦しむことでしよう。
- このことを踏まえ、二人の運命を変えるような過去改変プロジェクトにしようと考えました。過去改変といえは若い世代に人気の漫画「東京卍リベンジャーズ」があります。授業の元ネタとして紹介することで、少しでも親しみを持ってくれると嬉しいです。
- 基本的には教員はファシリテーターとして動き、生徒主体で考えてもらうプロジェクト型の授業です。いわゆる典型的な国語の授業とは少し異なるスタイルかもしれません。授業内ではスライド、スプレッドシートを使います。スプレッドシートをワークで使うメリットは、クラスルームで配信すれば生徒一人ひとりの進捗状況をリアルタイムに把握できることです。PC一つあればコメント機能でアドバイスもできますし、机間指導の際、どのグループをサポートすればよいか一目でわかります。
- 授業の大まかな流れ

- ③ あらすじの内容を踏まえ、簡潔にどのような話なのかを説明する。アウトプットすることであらすじの内容を定着させることが目的です。自ら考え、話そうとすることを重視するため、内容の良し悪しは問いません。
- を読む。基本的には黙読ですが、生徒の学力に応じて自動音声による読み上げを補助的に使用したり、本文を何分割かして、それぞれ読む人を割り当てたりするのが良いと思います。
- 豊太郎とエリスの出会いのシーンを抜粋
(前略) 寺院の門の前には声をおさえて泣いている一人の少女がいた。年は16か17くらいだろうか。プラチナブロンドの髪に透き通るブルーの瞳、綺麗な格好をした彼女に私は一瞬で心を奪われてしまう。(中略)
- 事情を知った母親は先ほどの非礼を詫び、私を家の中に招いた。改めてみてもエリスは貧民街の出身とは思えないほど美しい容姿をしていた。部屋には似つかわしくない高価な花が生けてあり、まるで娼婦の部屋のようなだった。聞くとエリスの雇い主であるヴィクトリア座の座長はお金を貸す代わりに体を要求してくるとう。お金を得るためには体を売る覚悟もしていたエリスであったが、豊太郎はその見返りに何も求めなかったのが彼女の目には感謝と感激の涙が溢れた。(後略)



「舞姫」の授業の一提案

「「掠鳥通信」を援用して

はしもと
たけし
橋本 剛

足立学園高等学校

■はじめに

「掠鳥通信」をご存じだろうか。「掠鳥通信」とは森鷗外によって発信された海外情報集である。本稿では、金子幸代氏の研究を踏まえ、「掠鳥通信」を用いたアクティビティを通して、「舞姫」の主人公である太田豊太郎が受けた教育について考察を深める授業を提案する。

■三段階の教育

今回の授業案では、「舞姫」本文の概要解説の中で、重きを置いておきたい部分がある。豊太郎の人格形成をもたらす教育についてである。

作品中で豊太郎は、自分が受けた種々の教育について触れている。具体的には、日本での若年時の教育と、ドイツの大学での教育と、ドイツの社会での教育である。

一つめの、豊太郎が日本で受けてきた教育は、言わば知識偏重の教育である。まず母は豊太郎に、「活きたる

辞書」となることを求めた。社会人となるも、今度は上司に「活きたる法律」となることを求められる。なぜなら、こうした知識のみの蓄積こそが、当時の日本では出世の王道だったからだ。上に立つまでは、知識をどう活用するかを考えさせない。

二つめに、ドイツにおける大学での教育だが、これはそのまま大学教育、すなわち官学を指すものではない。ドイツの大学に通ううちに身につけていったものことである。「既に久しくこの自由なる大学の風に当たりたればにや、心の中なにとなく穏やかならず」と述懐するように、キャンパスの学生・教授らが醸し出す雰囲気から主体性を学ぶ。

三つめはドイツにおける社会での教育だが、これは豊太郎が「一種の見識」を身につけた「民間学」である。民間学とは在野の学問のことで、ここでは新聞・雑誌の記事から、リアルタイムでの国内外の情勢を考えていく

ことである。こうした知識や思想は、大学では習えない。つまり、日本はもちろんドイツの大学でさえ教えない、現実に即した実学と言える。これによって社会を見抜く総括の見識を身につけたのである。

この豊太郎が受けてきた教育の軌跡は、決して逆転や皮肉といった言葉では形容されない順当さがある。日本では、封建的・前近代的知識偏重の教育を受けてきた。ドイツの大学では、先進的気風の中で主体的な思想を学んだ。そして最後に先進国ドイツの大衆の中で、極めて現実的な民間学により総括的見識を身につけた。しかし、最初からいきなりこの見識を身につけることはできない。主体性はないものの、日本で多くの知識を身につけていたからこそ、ドイツの大学で、それらを主体的に応用することができた。大学で主体的な思想を身につけられたからこそ、総括的見識を体得できたのである。つまり教育面だけは、順境と言っていいほどのステップアップを遂げており、留学生としては最高レベルの成功を収めたのだ。

■掠鳥通信

「掠鳥通信」は、明治四十二年に雑誌『スバル』第三号に掲載されて以降、『スバル』休刊まで五十五回にわ

たり連載された海外情報集である。作者は、ドイツ近辺在住とおぼしき「無名氏」を名乗る森鷗外（日本在住）で、その内容は極めて多岐にわたる。量も膨大で、岩波文庫版はノンセクションの記事が長短合わせて四百ページ以上の文庫本三冊分にも上る。

金子幸代氏はその著書『森鷗外の西洋百科事典』（鷗出版）の中で、『「無名氏」は帰国せずにドイツに残った豊太郎であり、鷗外自身でもある』と述べている。豊太郎とエリスの悲劇的な別れが明治二十二年。それから二十年を経て、日本に海外のトピックを配信する無名氏は、この解釈に基づくと、帰国よりエリスを選んだパラレルワールドの豊太郎だということになる。鷗外が鷗外を名乗らず、架空の無名氏を名乗ったのも、そうした理由が考えられる。ならば、豊太郎が獲得した総括的見識をもって書かれた海外からの通信記事を具現化したものが、この「掠鳥通信」ということになる。これを生徒に読ませ、そこから豊太郎の総括的見識の一部を体感させることはできないものかと考えた。とはいっても、当の「掠鳥通信」の内容は、以下のようなものだ。

○イタリアに追剥の事を書いた為に殺された記者がある。

○ロンドンでは余り女権党が荒れ廻るので、とうとう女巡査を拵えるということだが、どうか。

○ペエテルブルクでは賤民が避病院を襲撃してコレラ病人を解放しようとした。コレラは医師が種えるのだと信じているのだそうだ。

○ベルリン大学でインド人が二人学士になった。皆化学者である。

○飛行機の始祖として、イカロスの記念像をクレタ島に立てる。

○東洋旅行をして来たウイーンの女アリス・シャレクは支那人に同情すべし、日本人に同情すべからずと、大気焔を吐いて喝采を博している。

○アメリカでクリスマスに永遠にこわれない人形を売り出した。(以上、アルファベット表記の固有名詞はカタカナに改めてある)

このように、およそ寄せ集め以上の評価をしにくい、ランダムな海外トピック集である。ゴシップ記事も多い。ここから「総括的見識」を感じさせることはできるのだろうか。そこで考えさせたいのは、この「見識」とはあくまで「民間学」によるものであるという点だ。当時でも、日本にいながら、世界の大きなニュースを

■アクティビティ

生徒がイメージしやすいように、異文化交流を背景として考えさせるのが良いだろう。「棕鳥通信」の書かれた当時の学生の立場で、同年代の海外の人々と交流を持つ機会に、会話のきっかけとなる話題を集めるアクティビティとして、「棕鳥通信」の記事を読ませる。もちろん事前にこのアクティビティの狙いは、先進国の人々に対し引け目を感じることなく、対等に渡り合っていく精神的土壌を作ることであると説明しておく。記事はあらかじめこちらで数十に絞って選んでおく。その中から生徒に、自分が異文化交流のきっかけとして使う記事を選ばせ、そのトピックを元に、どのように会話を膨らませていくかを考えさせ、書かせる。

例えば、先の「東洋旅行をして来たウイーンの女アリス・シャレクは支那人に同情すべし、日本人に同情すべからずと、大気焔を吐いて喝采を博している。」という記事を選んだとしよう。わざわざ東洋を選んで旅行したにもかかわらず、日本を批判している点が気になる。鍵になるのは、中国に対しては好意的である点だ。当時の中国と日本に対する印象の差を聞いてみたい。また、それに対して多くの人々(ドイツ人)が同意している。ドイツ国内の民間人は、日本と中国をどのように捉えている

知ることではできた。新聞の購読者も増える一方であり、一面記事で海外の動きが紹介され、それが多くの日本人にも読まれるようになってきた時代である。しかし多くの日本人、言い換えれば一般的な日本の「民間」人の間で会話の俎上に載るニュースは、むしろ三面記事の方ではないだろうか。

欧化主義全盛の当時、海外のニュースは正に世界史に残るような激動として報じられることはあっても、三面記事のような細々とした「民間」人の話題として、日本人に届けられることはなかったはずだ。そうした中で『棕鳥通信』が果たす役割とは何か。欧米の出来事を、距離的にも文化的にも遠い先進国の出来事として捉えるのではなく、一般的な日本人と近い人々の出来事と感じさせることだったとは言えないだろうか。先進国でも一般的な「民間」人は、自分たちと同じように馬鹿なことをやりもするし考えもするのだ、と思わせること。欧米は手の届かない先進国ではないと、少なくとも「民間」レベルでは思えるように導くこと。当時の海外通信員の本分が啓蒙であるとするならば、こうした三面記事の紹介はうってつけだったと考えられる。

ののだろうか。さらに、その負の印象を返上するために、我々日本人が今なすべきことは何だろうか、といった疑問が生徒から発せられれば、実際のドイツ人からも率直な意見をもらえよう。選ぶトピックによって様々な会話の発展のさせ方が考えられる。自身の知識と絡めて種々のケースを考えさせたい。当時と現代とをない交ぜにしてしまう生徒も出てくるだろうが、あまり設定を厳格にしなくても良い。

最終的に、こうした記事の数々が、民間レベルでの交流や意識の向上に役立つという感覚を生徒に持たせることができれば、とりあえずこのアクティビティは成功と言えるだろう。その上で改めて豊太郎の仕事が、後進国日本人の人々が感じる先進国民との意識的距離の短縮であつたことを確認する。

三段階の教育によって豊太郎が行き着いた先が、ここである。薄給ではあるが、天方伯に付き随い、元のエリート街道に戻る道を捨てた甲斐のある仕事であると、充分言えるだろう。無名氏(『パラレルワールドの豊太郎』)の傍らにいてあるうエリスとその子供にも胸を張れる職務だ。といった、明るい結論に導く展開の授業はいかがだろうか。

詩の教室へようこそ

第五回 呼吸をするように

詩を読むことと書くこと。この二つの往還をテーマとしてきた、詩人^{わかまつ}和合亮一^{りょういち}先生の連載。今回はゲストとして若松英輔先生をお迎えし、「読む」と「書く」との向き合い方について語り合っていました。

〈対談〉 若松英輔^{わかまつ へいすけ}

和合亮一^{わか りょういち}

批評家・随筆家。文芸評論から哲学、宗教、詩作に至るまで幅広い分野で著作活動を続けている。主な著書に『イエス伝』『小林秀雄 美しい花』、詩集『見えぬ涙』『愛について』など。

福島県立福島北高等学校教諭。中原中也賞、晩翠賞受賞。萩原朔太郎賞受賞。二〇一一年の東日本大震災で被災した際、Twitterで「詩の礫」を発表し話題に。校歌、合唱曲作詞多数。

✿ 正解がないことを考え続ける

◆和合 四月から使われている教科書『言語文化』（大修館書店）に若松さんの「文字の深秘」が掲載されています。率直なところ、書き手としてどのようにお考えですか。

◆若松 現在、自分の書いた文章が四〜五冊の国語の教科書に採録されているほか、大学の入試問題などにも採用されています。実は私は、ともかく国語が苦手で、授業は嫌いではなかったのですが、点数がすごく悪かったんです。自分が書いた文章で、入試の合否が決まると思うと、なんだか気分が重たいですね（笑）。入試問題などを見ると、書き手として「正解なんてそう簡単

に言えないのではないか」と感じることや、「答えがない」「正解が複数ある」と思うことがあります。そのような、選択肢の中から正解と思われるものを選ぶという思考法は、若者にとって本当によいことなのかを危惧しています。正解がないものを考え続けることは、とても大事なことです。正解を人よりも早く言い当てるのは、社会生活でも有用ではありません。あまり「こういうふうに読みましょう」と言わずに、固定しないで読んでいただけると、私としては幸いです。

◆和合 私は現在、教師として高校生を教えています。教科書を一つの仲立ちとして生徒と向き合うことで、常に新しい発見が

あります。文章は、答えがないものや言葉にできないものに向かって書かれるもの。一つに明確な答えが導き出せないものほど、生徒や教師の心に残る気がしています。若松さんの文章にはそれがあると感じます。

◆若松 文章は書かれたときではなく、読まれたときに完成します。若い人たちに読まれたときに完成されていく言葉が、自分の中に生まれてきていたことはありがたいことです。国語は苦手でしたが、本を読むことは嫌いではなかった。ちよつと変わった子どもだったんです。芥川龍之介や夏目漱石、小林秀雄の文章を自分なりに読んで、一冊の本や作家との出会いを楽しんでいました。「読む」とは、その人しか切り拓

くことができない地平を切り拓いてゆくことです。勉強は苦手だけど、「読む」ことを楽しんで、学ぶことを愛している。ただ答えがうまく見つけられない。そんな子どもたちを大切にしてほしいと願っています。

◆和合 とても大事なことで感じます。授業は生徒のリアクションによって作られるので、生徒の目の動きや溜息など一つ一つが教師にとっては大切です。大学生のとき、大学の教授に「『力動する授業』を目指してください」と言われました。決して、一つの方向に向かわなくてもよい。でも、先生と生徒の両方が歯車となって動いていることが大切だ、と。

◆若松 そうですね。「わかる」「わからない」と関心の有無は別です。わからないことは関心や探究心につながります。でも、わかっていることは探究しません。子どもの探究心が飛躍的に伸びることがあります。その種子は学校で植えられますが、必ずしも、学校の三年間で開花するとは限らない。そういう若者たちを、見捨てずに見守ってほしいと思います。桃栗三年柿八年。柿の木は、八年後に柿にしかつけれない

実をつけます。「勉強」と「学び」は違う。「勉強」は目的と期限がありますが、「学び」は目的が定かではなく、期限もありません。学校は、勉強の場ではありますが、「学び舎」でもあってほしい。その方向で若者たちに開かれるとよいですね。

✿ 文学経験はどのように開花するか

◆和合 若松さんが創作活動をしたと思ったのはいつ頃ですか。

◆若松 けつこう早くて、本を読み始めてすぐの頃、一七歳くらい のとき、「物書きになりたい」と思いました。その時期に、日本ペンクラブの大会に参加し、作家の加賀乙彦さんと出会い、一時間ほどお話をさせていただく機会を得ました。加賀さんは「書きたいけれど、どうしたらよいかわからない」という私の思いを受け止め、深く話をしてくださいました。本を読んだり書いたりするのはもちろん大切ですが、本物の書き手に生で会うことも大切です。

◆和合 私も成人するまでは、自分が詩を創作するなんて考えたこともありませんでした。高校時代も、自分から何かをするよ

りもみんなとはしゃいでいるほうが自分らしいと思っていましたし、考えることも、人にどうウケるかばかり……。二〇歳を過ぎて萩原朔太郎の『月に吠える』と『青猫』に出会ったとき「生まれたときからこれを求めていた」と感じました。読むことと書くことの衝動は同じです。それから詩を書くようになり、自分がどんな変わっていききました。ちょうどその頃、井上光晴さんの文学講座を聞きに行く機会がありました。若松さんと同じで、それが、本物の作家との生の出会いです。その講座には、真剣に文学と向き合う人たちがいて、そこでの濃密な時間はかけがえのないものでした。

◆若松 文学と真剣に向き合う、言葉を深く体験するという経験が、表現者という形ではなく、別様に開花することがあります。創作という、絵を書く、音楽を作る、文章を書く……ということを思い浮かべがちですが、仕事を立ち上げることなども、とてもクリエイティブです。国語の授業で学んだことも、まったく違う形で開花することのほうが多いのではないのでしょうか。



和合 亮一

✿ 真似をして、真似を脱する

◆和合 今年の四月から、新しい国語の授業が始まりました。新しい教科書には創作が入り入れられています。現場ではなかなか実践できていないと個人的に感じます。

◆若松 創作によって、自分の詩や作品を作ることができればとてもよいですが、まずは「引用」から始めるのはどうでしょうか。たとえば、一冊の本を読んで、大事だと思うところを十箇所引用すると思います。生徒によって引用する箇所は見事に違います。短く引用することはとても難しい。引用によって浮かび上がった世界はすごく創造的なものです。次に、引用した文章に表題をつけるということをしてもら

います。引用した文章を一つの絵画のように見立てて、それにタイトルをつける。このタイトルは、形を変えた一行詩で、詩の精神「ポエジー」が表れます。引用が的確にできるようになると、必ず文章が書けるようになるんです。

◆和合 面白いですね。私も創作の敷居を低く考えていけたらよいといつも感じています。

◆若松 引用をするのは、一冊の本だけでなく、教科書の教材でもかまいません。引用することで、「読む」ことがとても創造的だということに気づきます。そして、「読む」という創造性を鍛えることが「書く」という創造性につながっていきます。

◆和合 知らず知らずのうちに、「書くこと」を教師が特別なものとしてしまっているのかもしれない。「鍛錬を積んだ人しかよいものは書けない」「内容が深くなければならない」というような思いに無意識のうちに縛られているのかも。ゼロから始めることに力点を置き過ぎず、まずは真似てみる。子どものもつ真似をする力、そこから学び取る力を生かしてもよいのではない

でしょうか。

◆若松 そうですね。本当に学び取ることが上手になると、真似するのをやめるようになります。本当に学び取ることができると、学び取ったものと自分の中にあるものが違うことに気づきます。人は、あこがれると真似をしてしまうものですが、「やっぱり真似はできない」ということに気づくところから、本当の面白さが始まります。

◆和合 室生犀星は詩作にまつわる本の中で「詩というものは先ず真似をしなければ伸びない。そしてその後、きれいに真似の屑を棄てなければならぬ」と言っています。まず真似をして、本当に自分らしいものができたら、屑を棄てる。私はこの言葉を知って、気が楽になったことがあります。

◆若松 屑を棄てるまでの人間は、屑こそが大事なものだと思っています。「あなたが大事だと思っているものは、あなたが本当に大事にしなければいけないものに比べて大事ではない」ということを、教師が伝えてあげられるとよいですね。

✿ 独りになることの「学び」

◆和合 現在は、インターネットを通して、凄まじい速さで情報を得ることができず。国語の教科書でも、QRコードをかざして動画を見て、すぐに情報を得ることができそうです。そのような中で、物を書いたり、調べたりすることの本当の難しさ、それを乗り越えた後の静けさや時間の重みを感じることが、どこかできなくなっているのではないのでしょうか。

◆若松 本当の意味で「読むこと」と「書くこと」を行うとき、私たちは必然的に独りになることを強いられます。一方、「話すこと」と「聞くこと」は他者がいないと成り立ちません。この両方が本当に豊かに行われるとき、「勉強」から「学び」へと移り変わって、意味あるものになると思います。授業は五〇分ですが、数日後、一週間後の次の授業までの間、会っていない時間に起きる学びが大切です。独りになって読んだり書いたりする。そこで見えるものには、言葉にならないものが多くあります。言葉にならない大切なことを深く認識している

とき、沈黙せざるを得ないことは珍しいことではありません。そのことを「黙っている」ともわかってるんだ」と生徒同士が尊重し合えるといいですね。

✿ 「書くこと」は手放すこと

◆和合 若松さんは、「読む」「書く」ということをテーマに数々の執筆をされていますね。

◆若松 「書く」ということについて、私は二つのことを大切にしています。一つ目は、「書く」ということは、自分の中に経験を定着させることのように感じますが、高村光太郎は「自分は彫刻家だ。詩を作るということは、自分の彫刻を純化するために、自分の中にあるものを手放して彫刻を作る準備をすることだ」と言っています。書くことは、一人の人間として何かをつかむために、今までにあるものを手放すことなんです。

二つ目は、自分のために書くということ。私たちは、言葉にならないものに向かって、書くことと向き合っています。自分の知らない誰かが、自分の書いたものに



若松 英輔

何かを見つけてくれたら……という願いはありますが、それは淡い期待であって、結局、自分の人生を照らすために書いている。言い換えれば、書くことによって人は自分の人生を照らしうるのです。

◆和合 私は、詩がつまりは日記だと感じています。読み返すとそのときの自分が鏡のように見えてくる。自分の人生が比喻化され、生きてきた時間がその内側へと深く溶け込んでいく感じがある。それが、いまこの瞬間を照らし出してくれているのかもしれませんね。暮らした日々には自分の姿を鏡で眺めることと同じようにとらえているから、詩を書くのは日常的で、とても当たり前のものになる。そのような暮らし方を生徒たちに伝えていきたいです。

大修館書店 学習辞典・国語便覧のご案内

新課程・共通テストにも対応！



明鏡国語辞典 第三版

北原保雄〔編〕
B6判・1922ページ・二色刷
定価 3,300 円（税込）

大型版もあります

大きな文字 二色刷り 明鏡国語辞典 第三版

北原保雄〔編〕
B5判・1922ページ・二色刷
定価 6,710 円（税込）

新時代の国語力を強化！



ビジュアルカラー 国語便覧 改訂版

大修館書店編集部〔編〕
B5判・544ページ・オールカラー
定価 990 円（税込）



もっと知りたい！
を支える

トータルサポート 新国語便覧

大修館書店編集部〔編〕
A5判・608ページ・オールカラー
定価 968 円（税込）

＊詩の誕生、詩集の誕生

◆和合 私は詩を書きながら教師として教壇に立つ中で、どうやって詩を教えたらよいか聞かれています。若松さんも詩を書かれています。どのお考えでしょうか。

◆若松 詩人が詩を書くのではなく、真剣に詩を書いた人が詩人であると考えています。その意味で、詩は万人に開かれています。そして、万人の中に眠れる一冊の詩集がある。一人一人の中に言葉の姿をしていないエネルギーのようなものがあって、詩を書くことは、それを掘り起こすことにすぎません。どう取り出すかによって言葉が結実する、いかようにもなりうる詩集です。だからこそ、詩が書けないなんてありません。あるとき、詩人が誕生する、眠れる詩人が掘り起こされる瞬間があるんです。同じように、詩集が生れる瞬間もあります。ただ、詩人の誕生を告げ知らせる作品は別の、詩集の誕生を告げ知らせる作品は別のものです。多く作品を書く詩人でも、詩集がまとまらないことはあります。でも、詩

＊呼吸のように「読む」「書く」

◆和合 すごくよくわかるお話です。生徒たちの日常生活、何気なく書いたもの、話していること、感じていることの中に、詩はすでに宿っている。それを、気づいていないだけなんだと思います。そして、私たちはお互いに「それは詩だよ」「詩集になるんだよ」と照らし合うことができるということが重要なんですね。

◆若松 「読む」と「書く」は、自分に出会うための最も確実な道です。もしも自分がわからなくなったり、信じられなくなったりしたら、「読む」か「書く」のどちらかを真剣にやってみることをおすすめします。「読む」と「書く」は呼吸のような関係なの

で、どちらかを真剣に行えば、自ずともう一方も行うようになる。だから、まずはどちらかだよ。私たちは、自分に本当に必要なものを、誰かに与えられるのではなくて、自分で生み出すことができます。若い人たちは、そのことを知っておいてほしいですし、先生方には、それを支えてほしいですね。

◆和合 「読む」が「吸う」で「書く」が「吐く」だとすると、その呼吸がとても大事ということですね。高校教師をしながら創作活動を行うことについて、よく「大変ですね」と言われます。でも、私にとって、「読む」と「書く」は呼吸と同じ。先ほど姿見の鏡を引き合いにして述べたように、暮らしの中で見ずにはいられないもの、日常的で身近なもの、そしてとても敷居の低いもの、ということですね。そのことを、教育の現場でも話をするべきですし、創作者同士でも言葉を交わしていきたいと思っています。今日は長い時間ありがとうございました。

本連載では、高校生の詩の作品を募集いたします。奮って応募ください！（詳細は64頁）

特色2 新語から学習に役立つ語まで 最新の言葉を約 3500 語増補

- 時代を反映する語…SDGs／ワークライフバランス／食品ロス／サブスク／キャッシュレス
- 新語…エモい／イケボ／バズる／ほぼほぼ
- 評論文キーワード…心身二元論／サステナビリティ／生物多様性／ソーシャルメディア
- 教科書の定番教材の語…詩美（檸檬）／フェータル（城の崎にて）／妙境（夢十夜）

特色3 元祖 誤用までわかる国語辞典 言葉の正しい使い方を解説

- 「アニメ好きの血がうずく」「今回だけは多めにしよう」「恩恵にあやかる」「部長から寸志を賜る」「有利に立つ」などつい使ってしまうがちな誤用や、「捜査が佳境を迎えている」「爪痕を残せるよう頑張りたい」など気になる表現をさらに増補して解説。
- 正しい言い方・使い方もわかる。

特色4 「恥ずかしくない大人の言葉遣い」 をサポートする 「品格」欄

- ふだんづかいの言葉から、改まった場面でも使える言葉を調べられる「品格」欄を新設。
- 品格語は用例とともに示し、どんな文脈で使える言葉なのかがわかる。

明鏡国語辞典 第三版

北原保雄「編」

B6判・1922ページ・二色刷
定価 3,300 円（税込）



特色1 二色刷！ 探しやすく読みやすい紙面



- 項目が探しやすいのはもちろん、**注意** **使い方** **書き方** など解説のマークがつけやすく、知りたい情報にすぐにたどり着ける。
- 解説の長い重要語は意味の近いグループごとに分けて「仕切り」を入れ、調べたい意味がどこに書かれているか探しやすい。
- 解説と用例で書体を変え、読みやすさを追求。

きも **肝** **胆** **二名** ①内臓。膽腑。五臓六腑。②肝臓。三鳥の一。③精神。また、精神力。胆力。④**新**重要な点。肝心なところ。三話の一「ここがだ**開き方**」キ主と力タ力ナで書くことも多い。

など

おも(主)重(重)形動。主要なさま。中心である。「今月の『な行事』」当地の『な産物』▼「おもな(まに)に文語形。おもな(な)とおも(主)の形が使われる。おもな(な)を連体詞として扱ったものもある。↓主に 固めおも(主)に(対象は小学生だ)「主だった」人々(な)おも(主)と読む。「主」じて参加者は小学生だ(「主が主となる(学生が主となって立てた企画)は、**主**」と読む。

[illegible]

- といった意味の時にどの漢字を使うのか、同音異義の漢字を解説した**書き分け**欄。
- 『異字同訓』の漢字の使い分け例」（平成 26 年文化審議会報告）に準拠。

●同じ漢字で意味が似ている語の読み分けを示す「読み分け」欄。

日本文化の言葉・文学によく出てくる言葉を解説するコラム
「ことば比べ」「ことば探究」

▼釜は飯を炊くのに使う器具（＝お釜）。
▼窯は陶磁器、ガラス、炭などを作ったり、ピザなどを焼いたりするために、素材を中に入れて熟す（ゆ）る。
▼【電】は調理器具を上にかけて素材を熱するところ。

「いぶかる探究」「いぶかる」の使い方

▼疑問に近い意味をあらわすが、「いぶかる」は「人間の意図・事情・ありかたに対する疑念に重点があり、情報が必要かどうかを単純に疑う意では使えない」。

「×天動説をいぶかる科学者が現れはじめた」「○太郎の態度の急な変わりようをいぶかる」「○なにかよくない意図や問題がある、隠れているのではないかと」といふニュアンスがある。

「部長が急になれなれしくしてくるのをいぶかる」(＝意図が分からず、疑念を持つ)

「参加者は急な日程変更をいぶかった(＝何かトラブルがあるのではないかと疑問に感じた)」

- コラムを約 60 本増補。
- 「蕨（いらか）」と「屋根」、「火鉢」と「いろり」、「釜（かま）」と「窯（かま）」と「竈（かまど）」など、日本文化に関わる言葉を比較して解説する「ことば比べ」。
- 「いぶかる」「すこぶる」「刹那」「ねぎらう」「ゆえ」など、文学作品によく出てくる言葉の使い方を解説する「ことば探究」。

特色10 知りたい情報にたどり着ける **便利な索引**



- 第二版で好評をいただいた別冊索引を、第三版では本体に組み込んでパワーアップ。
- 索引は「明鏡 利活用索引」「アルファベット索引」「難読語索引」の3種類。「明鏡 利活用索引」では、誤用、気になる言葉の使い方、「品格語」、どこを引いたらいいかわからない語が引ける。

特色

2

見やすく、わかりやすい資料が満載！

写真資料 1500 点以上、資料 600 点以上を収録した、
ビジュアルでわかりやすい国語資料集。

巻末付録「世界を知るためのテーマとキーワード」



5 大テーマ
「環境」「社会」
「情報・技術」
「国際」「生命・科学」
の論点を視覚的に解説
します。

デジタル資料
参照項目には
マーク付

音声
動画
資料

特色

3

いつでも、どこでも、まなびにアクセス！

好評の動画リンク集「まなび動画 Navi」がパワーアップ。
オリジナルコンテンツを含む、新感覚の国語資料をそろえました。

体験版は
こちらから

●「デジタル版 ビジュアルカラー国語便覧」を同時発行！
新課程「現代の国語」「言語文化」教科書と連動して使えます。



累計 50 万部超！
主体的な学びを支える最強の便覧

ビジュアルカラー

国語便覧 改訂版

大修館書店編集部 [編]
B5 判・544 ページ・オールカラー
定価 990 円 (税込)

新課程対応！

●表紙イラスト・田中寛崇



特色

1

新しい時代に求められる国語力を強化！

実生活で役立つ国語の力を身につけるために、
さまざまな工夫を盛り込みました。

巻頭特集「未来につながる国語の力」

思い切り楽しみながら
想像する力・発信する力・共感する力をはぐくむ
教室が動き出す活動をご提案します。

生徒が主体的に
学ぶ力を支えます。



高校生に身近な事例をもとに、
「話す・聞く」「書く」「読む」
のポイントを丁寧に解説します。



新国語便覧

大修館書店編集部 [編]
A5判・608ページ・オールカラー
定価 968 円 (税込)

言語文化・探究学習

古典から現代につながる伝統的な言語文化を視覚化。

書く力・語彙力

「書く力」と語彙力を養う「言葉の知識編」「表現編」が充実。



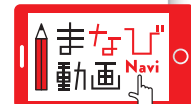
図表・データ

統計データやグラフの読み取り、レポート・小論文を書くためのページが充実。

便覧活用の幅がさらに広がる、充実のサポート！

生徒用
まなび動画
Navi

スマホ・タブレットなどで視聴できる関連動画や音声を紹介。便覧とあわせて使うことで、主体的な学びをナビゲートします。



指導用
準拠CD-ROM

本文テキストや画像、準拠問題データに加え、小論文指導・動画活用・探究型学習・新テスト対応のワークシートを収録。



BOOK REVIEW



いま、高校生に読んでほしい本

「考えないと楽ですが、楽をする」と後で損をしますよ。」(P.21)

新書『バカの壁』が国民的な大ヒットとなり解剖学者である養老孟司先生は作家としても大いに人気を博している。冷静に人間の営みを見つめ続ける視線はまったく揺るぎなく、発するメッセージも平易で伝わりやすいからである。

昨年、養老先生に直接取材させていただく機会に恵まれたが、八五歳という年齢を感じさせない若々しさに驚かされた。自然体の生き方、柔軟な思考、豊富な人生経験にもとづく説得力が話の端々から感じられ聴き入ってしまった。

養老孟司『養老先生のさかさま人間学』（どうさん出版、二〇二二年）

この世を知り尽くした養老先生の視線は鋭く確かだ。混沌とした時代を生き抜くための「学び」にあふれた一冊。

うちだ たけし
内田 剛
ブックジャーナリスト。約三〇年の書店員勤務を経て、二〇二〇年よりフリーに。NPO本屋大賞実行委員会理事。

豊かな自然に囲まれた鎌倉に長きにわたって在住している先生が感じるのは最近、明らかに虫が少なくなつたことだそう。殺虫剤による生態系の狂いによるものだが、虫も食わない野菜が本当に体に良いものなのか。自然と人間との共生について大いに考えさせられた。

そんな養老哲学のエッセンスを身近に感じさせてくれる絶好の一冊が本書だ。ちなみに出版元の「どうさん出版」は「世界一田舎にある出版社」の触れ込みで養老先生が顧問をされている会社である。

自分の頭で考えること、生きるために学ぶこと、自然に目を向けること、科学の視点を持つこと、社会の常識を疑うこと、不確実な時代をどう生きるかということ、をテーマに語っているのだが面白いのは

そのユニークな構成である。

見開きページで展開されるお題は全部で八五個あり、すべて漢字一文字なのだ。そこから自由に発想を広げて先生が論じていく。最初の漢字の「耐」からは「答えが出るまで我慢する」というエッセイが生まれる。続いて「草」からは「面倒くさい」と向き合う」という一文につながる。さらに「毒」からは「自分のモノサシを持つ」という論がはじまる。なんともユーモラスでスリリングなのだ。

即興的な試みであたかも生の授業を聞いているような気分にはさせる。AIにはない温かで贅沢な学びの時間がここに再現されているのだ。

気になる漢字からページをめくり養老哲学を存分に堪能いただきたい。

「やばい」信号、黄色か青か？

関根 健一

●日本新聞協会用語専門委員。元読売新聞東京本社編集委員。大東文化大学非常勤講師。著書に『なぜなに日本語』（三省堂）『ちびまる子ちゃんの敬語教室』（集英社）『文章がフツーにうまくなるとおきのことば術』『品格語辞典』（大修館書店）など。『明鏡国語辞典 第三版』編集・執筆協力者。

「新しく出した店舗はどんな様子かね？」
「うーん、やばいっすね」
「やばいって……お客が来ないのか？」
「いや、売り切れ続出で、もう大忙し」

*

—— 仕事上のやり取りでは「やばい」は使わないほうがいいですね。くだけすぎていて改まった会話にはそぐわないというだけではありません。肯定的な意味なのか否定的に使っているのか、紛らわしいからです。

明治時代に出版された隠語辞典に「やばい」は「危険なること則ち悪事の発覚せんとする場合のこと」とあります。『警察隠語類集』（警視庁刑事部編 警察図書出版 一九五六年）には、「盗犯等の仲間主として用いられるもの」とあって、「あ

やばい」の省略転化と載っています。別に「夜間に這う」からなどという説もあり、語源は定かではありません。いずれにしても、一般の人が日常、口にするような言葉ではなかったはずですが、身近に迫る危険を察知したり、困った状況が予測されたりしたときのひやっとした感覚が簡潔に表せて便利だったからでしょう、誰もが使うようになりしました。

「このままじゃ成績がやばいことになる」「やばい！ 遅刻しそうだ」など、注意を喚起するシグナルとしては、怪しげで荒っぽい語感がうってつけだったのかもしれません。

*

ところが、否定的な使い方ではなく、「あの映画見た？ やばいよ、今年のベストワン確定だね」

「主役の演技がやばくて感動した」のように、肯定的に評価する「やばい」も最近ではよく見聞します。否定的に使われていた言い方をあえて用いることで、強い肯定を印象付けようという発想から始まったものでしょうか。「やばい」を注意信号と捉えていると戸惑ってしまいます。

「仕事の量がやばい」のように、程度の激しさをいうときにも使われます。この場合も、こなせないほどの仕事を割り当てられて困っているのか、それともたくさんのオフアが来て喜んでいいのか、判断しかねる場合もあります。

*

もともと隠語・俗語に由来する言葉です。もう少し「品格」のある言い方を使ってみてはどうでしょうか。いろいろな面で悪影響が予想されるなら「不都合」、損失、失敗を招きそうであれば「不利」、いつ何が起ってもおかしくない状態は「一触即発」などと表せます。その頻度や分量に音を上げているなら「凄まじい」「甚だしい」ですね。反対に、望ましいことについては、「極上」「秀逸」「卓抜」、同じ類のものは数あれどその中でも、と

強調するなら「比類ない」はどうでしょう。

こうして言い換えを考えると、伝える側の教養や真摯な姿勢が感じられて、改まった場にふさわしくなるだけでなく、意味を限定して明確に指し示し、誤解を防ぐ効果もあると気づきます。

*

否定的な意味だったのが肯定的に使われるようになった言葉には「こだわる」もあります。

「老舗というこだわりを捨て、形式にこだわらない斬新なメニューを提供しています」
「執着せず、拘泥してないってことです」
「素材にこだわった、こだわりの逸品です」
「追求して、厳選しているというわけですね」

*

本来の意味や用法が変化していても、雰囲気や何となく伝わるかもしれません。ただ、両方の使い方が入り混じると混乱しそうです。特に、よく知らない相手、不特定多数の人たちに発信するしたら、その意味をはっきりと示すことが肝心です。その際には、「品格」を意識した言葉選びをヒントにしましょうか。

疑う「や?」と問いの「か?」

紫式部にファンレターを書こう⑦

おおくら ひろし
大倉 浩
筑波大学教授

前回から「係り結び」を考えています。

係り	はたらき	結び	例
ぞ	強調		都にぞ、行きける。
なむ	強調	連体形	都になむ、行きける。
や(やは)	疑問・反語		都にや、行きける。
か(かは)	疑問・反語		いづくにか、行きける。
こそ	強調	已然形	都にこそ、行きけれ。

無関係に見える「強調」と「疑問」にも、聞き手への働きかけという点での共通点があることを述べました。では、個々の係助詞にはどのような違いがあるのか。今回は「疑問・反語」の「や」と「か」について考えてみます。

古語辞典や参考書、文法副読本には、「か」は「誰」「いかで」など疑問詞とともに用いられるが、「や」は

これら疑問詞とはあまり用いられない、という違いが説明されています(上の表の例文も、この違いを意識して書かれていたのです)。しかし、それ以上の違いについて触れているものはあまりありません。時代や文体によっても差が大きいからなのですが、ここでは、古文教材の中心である平安時代の物語や和歌での違いを主に考えてみます。

疑問詞とともに用いられない「や」の疑問文は、
都にや、行きける。(都に行ったのか?)

のようになるのですから、答える側は現代語でいえば、
はい、行きました。

いいえ、行きませんでした/田舎に行きました。
のように、肯定・否定で答えます。つまり、話し手が断定しきれない「疑い(都に行ったかどうか)」を

示して、相手の答えによって確認する表現です。それに対して、疑問詞をとまなう「か」は、
いづくにか、行きける。(どこに行ったのか?)
のように話し手にとって不足している情報を「問い(どこか?)」として示します。答える側は、

都に行きました。

のように、不足部分の情報を補って提供してやることで答えになるわけです。

いきなりですが、英語の疑問文とその答えのパターンを思い出して下さい。英語では、

Q: Did you go to Kyoto? A: Yes, I did.

という、Yes/Noの疑問文と

Q: Where did you go? A: I went to Kyoto.

という、WHの疑問文の二種類がありましたよね。もちろん古文と英語を単純に比較することはできませんが、疑問の表現には、求める答えの内容によって文法形式にも違いがあり、英語の Yes/No 疑問文と WH 疑問文の違いのようなものが、日本語の古文では、係助詞の「や」と「か」の違いに現れているようなのです。つまり、「や」は、ことがらに対する話し手の疑いの気持ちの表明が元々の意味なので、その疑いを相

手が肯定・否定する Yes/No 疑問文のみに使われ、いづぼうの「か」は、聞き手に呼びかけて問いかける意味が元々なので、Yes/No 疑問文でも WH 疑問文でも両方に使えるのではないかとことです。

こうした解釈は、研究者の中でも意見が分かれており、定説とはなっていません。ただ、起源が同じと推定できる終助詞や問投助詞の「や」「か」の意味との関連を考えると、「疑い」の「や」と、「問い」の「か」という違いは妥当なものだと私は考えています。平安時代の和歌や物語など、情緒的な文章では、話し手の「疑い」と「問い」との表現の違いが重要だったでしょうから、使い分けがはっきりしていますが、記録や通信など実用的文章では、モヤモヤした「疑い」より、明確な「問い」が多く使われたものと考えられます。

歴史的には、平安時代には併用されていた疑問の係助詞「や」と「か」も、鎌倉時代以降には「か」の勢力が強まって終助詞化し、現代では主に「か」が、「疑い」も「問い」もともに示す疑問の意味の終助詞として使われています。



古典文法に関するご質問をお寄せください。

→大修館 HP 内「WEB 国語教室」からもお送りいただけます。

<https://www.taishukan.co.jp/kokugo/media/>

青山あり！

中国祠墓紀行

[WEB国語教室]運動

第七回 三蘇墳

(河南省鄭州)

文と写真

平井 徹

慶應義塾大学講師 (中国文学)



◆DATA

人物：蘇洵 (1009～66)、蘇軾 (1036～1101)、蘇轍 (1039～1112)。北宋の文章家。彼ら父子は、達意を貴ぶ文体である「古文」作家として、各々一家を成した。

墓所：河南省平頂山市鄭州荅芭郷 (しばきょう) 蘇墳寺村。県の中心地から西北へ23km。洛陽と界首 (安徽省) を結ぶ国道がすぐ脇を通っている。

アクセス：東京から ▶ 7h 鄭州 ▶ 3h 鄭州
あわせて行きたい：三蘇祠 (四川省眉山市)、東坡赤壁 (湖北省黄冈市)、蘇東坡記念館 (広東省惠州市)

三蘇とは、北宋の文豪蘇洵 (1009～66) と、その子蘇軾 (1036～1101)、蘇轍 (1039～1112) の併称。蘇洵を「老蘇」、蘇軾を「大蘇」、蘇轍を「小蘇」とも呼び、いずれも「唐宋八大家」に数えられる。特に蘇軾は中国文学史上随一のマルチな才人・芸術家・詩人として名高く、東坡の号で知られる。軾と轍の兄弟は艱難辛苦をともにし、一生を通じて深い兄弟愛を貫いた。

鄭州は河南省平頂山市の北端、省都鄭州市からは西南の方角に当たる。北宋期には鄭州と称し、汝州に属した。洛陽から潁昌 (現在の許昌市) へ至る古道の通過点で、

その道は、当時の都汴京 (現在の開封市) へと通じていた。北宋紹聖元年 (1104)、蘇轍が汝州知州 (州長官) に任官して赴任した際、久々に再会した兄の軾とともに、鄭州附近の名勝をめぐった。蓮花山 (海拔六〇七メートル、「五岳」の一つ中岳嵩山の南に列なる) 西南のとある一峰の美しさが、家郷四川の峨眉山に似ていると感じた軾は、その頂を「小峨眉山」と名づけ、その山麓を、自らの死後に帰する永遠の棲処と定めた。

中国では伝統的に、先祖代々が眠る墳墓の地に葬られることを望むが、蘇家の場合、故郷四川はあまりに遠すぎ、

弟轍をはじめとして、一族係累の多くが近辺に在住していたため、軾はこの地に墳墓を定め、親愛なる弟に後事を託したのである。その脳裡には、嘉祐四年 (1055)、故郷の四川を後にし、都汴京へ向かう途次に、父洵や弟轍ともども、初めてこの地に足跡を印した、若年時の記憶や印象があったかもしれない。

建中靖国元年七月、蘇軾は旅寓の途中、常州 (江蘇省) で病歿した。翌年の閏六月、子の蘇過らの尽力で、その柩はこの地に改葬された。そのいきさつについては、弟轍の「亡兄子瞻端明墓誌銘」の一文に詳しい。轍もその遺囑によって、歿後同地に埋葬された。元の至正一〇年 (1350)、鄭州 (鄭州) の楊允が蘇洵のために衣冠塚を築き、以後「三蘇墳」の名が定着した。

現代の鄭州は交通不便な一地方都市であり、気軽に足を延ばすというわけにはいかない。周辺に取り立てて見どころもなく、私が訪ねた晩夏の午後森閑としていた。近年、一帯のエリアは「三蘇園」として整理された。園内には、柏 (常緑樹のコノテガシワ) が鬱蒼と茂っており、「思郷柏」と名づけられている。明代には三万株あったというが、現存するのは約六〇〇。三蘇の生前に開創された廣慶寺 (別名蘇墳寺) 境内には三蘇祠が建ち、元代に作られた泥塑像が実に奥ゆかしい (中央が洵、左が軾、右が轍)。三蘇墳は、寺の東北三〇メートルの裏手奥にあり、神さびたたたずまいに包まれていた。明末李自成の乱、清嘉慶十八年 (1813) の大飢饉、北洋軍閥時代、近いところでは文化大革命による破壊など、数多の荒廃と補修を得て、現在に至っている。



▲三蘇墳 (左から蘇洵・蘇轍・蘇軾)



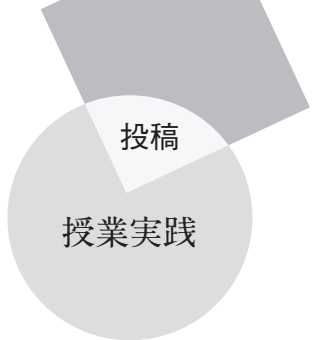
▲廣慶寺 (別名蘇墳寺) への道



▲三蘇祠正門



▲三蘇塑像 (左から蘇軾、蘇洵、蘇轍) すべて2010年撮影



投稿
授業実践

「読むこと」から「書くこと」へと連携させる授業作り

『枕草子』の類聚的章段を手がかりとして――

あきよし かずき
秋吉和紀

関西大学第一高等学校・第一中学校

■「言語文化」における「書くこと」

令和四年度より『高等学校学習指導要領』（平成三十年告示）に基づく教育課程が始まった。旧指導要領からの変化は多々あるが、その一つとして、各領域（話すこと・聞くこと）、「書くこと」、「読むこと」における標準時間数が示されたことを、ここでは挙げておこう。特に「書くこと」の時間数設定については、従来「読むこと」に多くの時間を割いてきた現場の関心は高い。「言語文化」においても、年間を通して5～10単位時間程度「書くこと」の時間数設定がなされており、本邦の伝統的な言語文化を活かした「書くこと」の教育実践が現場に期待されている。

■「書くこと」は「編集すること」

一口に「書くこと」と言っても、学習者の言語実践は「0から1」を生み出すようなものではない、と私は感じている。言うなれば、「書くこと」とは幾千幾万とある素材の中から、自分なりにそれらを切り合わせて、再構成するような営みである。こうした活動を、より平易に言い換えれば、それは「編集すること」と言える。

■「翻案」という方法論

では、古典作品を題材に「書くこと」編集することの現場での実践を考えた場合、どのような方法が考えられるか。その一つは「翻案」という方法である。「翻案」とい

う活動は、学習者が元々の本文で表現されたことの本質を理解した上で、素材の時代性や特殊性と自身との立ち位置の違いを勘案し、現代の文脈に据えて表現し直すものである。このように「翻案」という活動は、本文理解（「読むこと」）を、現代の文脈に再構成すること（「書くこと」）へと繋げるという点で、高度な学習活動と言える。こうした「翻案」の活動は、国語教育の中では「リライト」や「アダプテーション」という名で実践が繰り返されたものであり、決して目新しい活動ではない。しかし、古典の分野において、「読むこと」と「書くこと」が有機的に連携した実践が、これまでに必ずしも事例として多かったわけではない

だろう。更には、これまで多くの学校で「読むこと」に比重が置かれることが多かった古典分野においては、そもそも古典テキストを活用した「書くこと」の実践例の総体そのものが、それほど大きなものではないのかもしれない。

そのため、古典における「書くこと」はまだまだ教材開発の余地を残しており、加えて新指導要領で「書くこと」の時間数設定が示されたという状況が、汎用性のある実践モデルを現場から数多く提案することを後押ししている。本稿では、そのさやかな提案の一つとして、稿者が過去に行った実践の中から、『枕草子』の「類聚的章段」を用いた「書くこと」の指導を、学習者の成果物を示しながら紹介したい。

■「類聚的章段」を「読むこと」

「類聚的章段」とは、その名の通り書き手が設定したテーマに類する「もの」を列挙する章段で、別名「ものづくし」とも呼ばれる。この類聚的章段に関しては、そこで行われている「もの」の列挙の仕方が、単にテーマに該当するものの「羅列」ではな

く、一定の観点や法則をもとに並べられているであろうことが、複数の先行研究において示されている^{（注2）}。一見、テーマに即した「もの」の寄せ集めに見える類聚的章段には、「読むこと」の教材的価値がそれほどないようにも考えられるが、そこに一定の観点や法則が見いだせるとなると、そこに書き手の意図を読み取る学習活動を行う余地が生まれる。

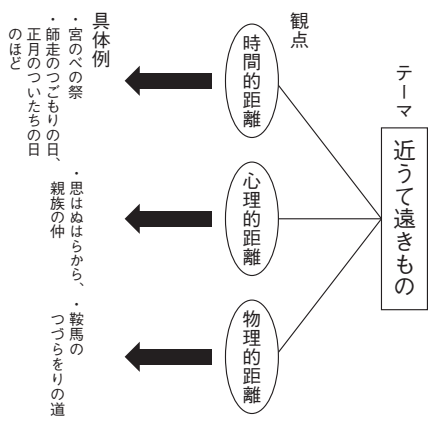
今回は『枕草子』の数ある類聚的章段の中でも、「近うて遠きもの」を例にして、まずは「読むこと」の学習について示していきたい。本文を以下に引用する。

近うて遠きもの 宮のべの祭。思はぬはらから、鞍馬のつづらをりといふ道。師走のつごもりの日、正月のついでの日^{（注3）}。

近くて遠い、というテーマに沿った形で、書き手がその例に当てはまるものを提示している。今回の実践では、「宮のべの祭」、「つづらをり」等を調べさせたり、語釈を加えたりした後、学習者に「何が近くて何が

遠いのか」という形で発問を投げかけ、グループで話し合わせて、以下の図1のように観点別にまとめさせている。

（図1）



一つ目の「時間的距離」に関しては、「日にち」としては接近しているが、「年が改まる」という点で時間的な隔たりがあることを説明するものである。二つ目の「心理的距離」に関しては、血縁や家族関係としては接近しているが、「情愛がない」という点で心理的な隔たりがあることを説明するも

のである。三つ目の「物理的距離」に関しては、出発点と目的地の直線距離は接近していても、実際の道のりは長いという点で物理的な隔たりがあることを説明するものである。

「読むこと」を通して得られた右の観点を、実際に「書くこと」の観点に転化させ、学習者に自分なりの「近うて遠きもの」を創作させるのが、次の段階となる。

■「類聚的章段」を「書くこと」

次に示すのは、二〇一七年に本校の生徒が創作したものの一部である。表記や表現については手を加えずにそのまま提示した。

・作品1

好きな人が目の前にいるのに自分は何もできず
相手がどう想っているかなんてわからない。片想い。

付き合っている
お互いに恥ずかしく

関しては、親密な者に対する「心理的距離」を題材としている。片想い、両想い、テレビの著名人に対する恋を列挙した上で、最後に「恋なんて全て近うて遠きもの」と評するところが秀逸である。

作品2に関しては、「物理的距離」は近いが「心理的距離」は遠い、という観点に揃えて作品を書いているように読める。

作品3や作品4に関しては、「時間的距離」、「心理的距離」、「物理的距離」を織り交ぜながら創作を行っている。作品3の「日本とブラジル」に関して、学習者に創作の意図を聞くと、「地球のマントルやコアを突き抜ければ直線の距離は近いが、実際の道のりは地球表面の弧に従うので、遠い」とのことを述べていた。また、「一年D組と二年D組」に関しては、「表記上は一画しか違わないが、精神年齢や身体の成長度合いは全く違う」とのことである。これに関しては、学習者が自分自身で新たに加えた観点であろう。

今回は、「近うて遠きもの」の観点を活かした創作を紹介したが、実際の授業では「すさまじきもの」、「はしたなきもの」、「遠く

一緒にいられない。両想い。

テレビの向こう側
どんなに想ってもそれは叶わぬ恋。

恋なんて全て近うて遠きもの。

・作品2

同じクラスの美少女。
目の前に彼女がいても話しかけられず、
思いのほか遠きもの。

目の前の美術品。
どれほど近くにあっても、
そのみ美しく、気品あふれている。

学校が変わった親友。

同じ町に住んでいても、
学校が違えばたりと姿は見えず。

・作品3

授業のラスト十分。
マンションの隣室の住人。
日本とブラジル。

て近きもの」等、他の類聚的章段をもとにして創作を行った学習者もいる。

■「型破り」と「型なし」

当代（五代目）の坂東玉三郎は、襲名の際に十四代目守田勘彌から「型破りな演技は、型を知らずにはできない。型を知らずにやるのは、型なしというのだ」という言葉を受けられたそう^{注1)}だ。この言葉は、「表現」ということを考える上で、非常に示唆的な意味を持っている。

今回は、古典の素材を用いながら、それを創作に繋げていく実践を紹介した。「書くこと」の下準備として「読むこと」を行う以上、学習者の創作活動に素材そのものの考えや価値観が大なり小なり影響することは避けられない。しかし、最初にも触れたように、そもそも私たちの言語実践の現実も先行する様々な言語実践の影響を受けているものである。言うなれば、私たちは無数の「型」を参照しているのだ。

よく言われることであるが、私たちたちが生まれた時点で獲得する言葉は「他者の言葉」である。そうした他者の言葉を真似

一年D組と二年D組。

・作品4
近うて遠きもの

あと1cmなのに手が届かないもの。

3Dメガネをかけると、
目の前にあるのに、実際にはスクリーンの向こう側にあるもの。

家から三十分ほどなのに、
一人で電車に乗っていると、
とても長く感じる。こと。

すぐそこにいる人なのに、緊張して
なかなか話しかけられないこと。

ショーウィンドウから
綺麗な服が見えたのに、
お店の中に入らないと
手にとれないこと。

以上が、学習者の作品である。作品1に

て自家薬籠中にするところから言語獲得や言語表現は始まる。獲得しなければ、世間からの評価が得られない「型なし」の状態だ。であれば、先行する多くの表現から多くの「型」を獲得し、自分なりに編集していくことが、豊かな言語能力の涵養になるのではないだろうか。

注1…木村陽子「国語教育とアダプテーション——高校「国語総合」教科書の「創作」課題の検証——」（『教職課程センター紀要 3号』、大東文化大学、二〇一八年）には二〇一八年時点での「国語総合」におけるアダプテーションの教材化の事例が詳細にまとめられている。

注2…例えば近年では、藤原浩史「『枕草子』類聚的章段の情報構造」（『中央大学国文 63号』、中央大学国文学会、二〇二〇年）、また、中田幸司「『枕草子』「うつくしきもの」の〈落しし穴〉——類聚的章段の〈読みくべきもの〉——」（『玉川大学文学部紀要 59号』、玉川大学文学部、二〇一九年）などがある。

注3…『枕草子 新編日本古典文学全集18』（小学館、一九九七年）を元にして。底本は三卷本系統第一類本の陽明文庫蔵本。

注4…NHK「プロフェッショナル仕事の流儀 言葉のチカラSP part2」二〇二二年二月六日放送）

関根健一 監修／大修館書店編集部 編
品格語辞典



四六判・並製・三〇四ページ
 定価 二一九八〇円（税込）

評者 星野 碧

「新商品がいつぱい売れるように、頑張ります！」

言いたいことは伝わるけれど、もう少し大人らしい、気の利いた……そう、「品格」のある言い方をしたい。そんなときに役立つ辞典だ。

冒頭の例文で言えば、「いっぱい」「売る」「頑張る」の「品格語」を、本書で調べることができる。「頑張る」を引いてみると、「精を出す」「力を入れる」「努力」「勤しむ」「精進」……と品格語の例が並ぶ。品格語には用例や解説も添えられており、場面や

文脈に合った一語を選ぶ際の手がかりになる。また、項目によつては「品格マップ」という図があり、品格語同士の使い分けもわかるようになっていく。

二〇二一年に刊行された『明鏡国語辞典 第三版』の「品格」欄をもとにして生まれた辞典だという。辞典ではあるが、つい時間を忘れてじっくり読んでしまう面白さがある。合間に登場する、いのうえさきさんのイラストも楽しい。中高生から大人まで、多くの人に活用してもらいたい一冊である。

三宅義藏 著
「羅生門」55の論点



四六判・並製・二五六ページ
 定価 二二〇〇円（税込）

評者 大井悟郎

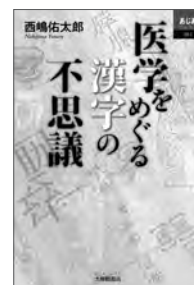
芥川龍之介が23歳のとき発表した「羅生門」は、半世紀以上にわたって国語教科書に掲載され続け、定番中の定番教材となっている。それはなぜか。この問いに、作品の内側から解を提示するのが本書である。

本書のベースは、某公立高校での特別発表授業だという。初読の疑問点を出し合い、それを班ごとに割り振り、答えを検討し合って発表する。例えば、「羅城門」を「羅生門」に変えたのはなぜか「暮れ方から物語が始まるのはなぜか」にきびが何度

も出てくるのはなぜか」……。このような問いから五十五を精選し、その解答・考察を丁寧なまとめ上げた。

解答は一つに絞れるわけではない。むしろ複数の見解に分かれることのほうが多い。そうした解釈の多様性、そして次々と問いを生じさせるテキストの力こそ、この作品を国語教材として不動の地位に押し上げたのだ。国語教師はもちろん、かつて教室で「羅生門」を読んだすべての元高校生たちに、再読を促してやまない書である。

西嶋佑太郎 著
 あじあブックス 81
医学をめぐる漢字の不思議



四六判・並製・二三二ページ
 定価 二四二〇円（税込）

評者 笹原宏之
 早稲田大学教授

高校生にして地元の方言漢字を調べて賞を受けた著者は医師となった。医師業のかたわら、文献を渉猟し時空を超えて医学用語の事実を追う。先行研究を分野など問わず足繁く求め、読み込み引用する。

「腔」の読みが「コウ」か「クウ」かなど、歴史を押さえ理詰めで語る。専門家だからこそ規範意識が先立ち、また慣れて疑問に感じない用語も取り上げる。二年間の濃密なウェブ連載に加筆を続けた。ペストの字の調査は評者からの問い掛けに

する回答かもしれない。「要」「周」の解釈は、分子の訳字や古来の字謎など漢字運用史に見られる柔軟性がヒントとなろう。

その執筆姿勢は知的誠実さと過去の人々への敬意の現れといえ、すでに一人の漢字研究者ともなっている。時計の針を進めた本書を読まずに医学用語の漢字を語ることはいらない。著者は漢字政策が専門分野を対象外としている状況を踏まえ、医学分野の漢字について医療に触れる全ての人々の真の幸せのために考え続けてくれるだろう。

佐野幹 著

「走れメロス」のルーツを追う

—— ネットワークグラフから読む「メロス伝説」



四六判・並製・三二四ページ
 定価 三〇八〇円（税込）

評者 今枝孝之

太宰治「走れメロス」がはじめて教科書に現れたのは、一九五六（昭和三一）年。これ以前にも、「メロス」の話は日本に数多く存在していた、たとえば、驚く人も多いだろうか。

その、未知の「メロス伝説」の広がり解き明かすが、本書である。最大の特徴は、「メロス伝説」の総体を明らかにすべく、ネットワーク科学の視点から、テキスト相互のつながりを可視化したこと。本書冒頭には、その「ネットワークグラフ」が掲載されている。数多のテクス

トが線で結ばれ、「メロス伝説」の伝播が一目で理解できる。時代順に進む本文の考察からわかるのは、「メロス伝説」が戦前・戦後、自己犠牲的な精神が日本人の中へ浸透するのに、大きな役目を負ってきた、ということだった。そして、「メロス」をモチーフにした作品は、今も生まれ続けている。「メロス」が歩んだ道のりは、私たちの想像以上に長く、入り組んでいる。

一五〇年以上のスケールの本書には、ある伝説の受容をめぐる、生きた歴史が脈打っている。

2022.4~8

国語の

News & Topics

国語・教育に関わる情報と
授業に役立つ話題を集めました。

📖 こども家庭庁設置

2022年6月15日、第208回通常国会で「こども家庭庁設置法」が可決され、2023年4月1日から「こども家庭庁」が設置されることになった。こども家庭庁は、内閣府の外局として置かれ、これまで文科省、厚労省、内閣府、警察庁などがばらばらに所管していた（いわゆる縦割り行政）、こども関連の行政事務を集約するねらいがある。そのため、一部の業務が内閣府や厚労省から移管された。



👤 石川忠久氏死去

2022年7月12日、中国文学者で元二松学舎大学長の石川忠久氏が心不全のため死去した。90歳。

中国文学、特に漢詩の研究で知られ、全日本漢詩連盟会長、全国漢文教育学会会長、斯文会理事長などを歴任した。新元号選定の際には政府から委嘱され、原案の一つ「万和」を考案した。

『漢詩への招待』『石川忠久 漢詩の稽古』『漢詩創作のための詩語集』（監修）など著

📖 改正民法施行

2022年4月1日に改正民法が施行された。改正法では成年年齢が20歳から18歳に引き下げられ、18歳以降は、親の同意なしにさまざまな契約行為を行うことができるようになった。また、女性の婚姻可能年齢が従来の16歳から引き上げられ、男女とも18歳になった。（ただし、飲酒や競馬などの公営競技などの年齢制限は20歳のまま）



📖 教育行政関係

- 高等学校で新学習指導要領実施（4/1）
- 改正民法が施行され、成年年齢が20歳から18歳に引き下げ（4/1）
- 「デジタル教科書に関する児童生徒アンケート結果」を中教審WGに提出。（4/25）
- 文科省、令和5年度「大学入学者選抜実施要項」発表（6/3）
- 「こども家庭庁設置法」成立（6/15）
- 改正教育職員免許法が施行。教員免許更新制廃止（7/1）

👤 国語関係・時事

- 本屋大賞発表。逢坂冬馬『同志少女よ、敵を撃て』（4/6）
- 沖縄本土復帰50年（5/15）
- 国連安保理の非常任理事国に日本が選出。12回目（6/9）
- 安倍晋三元首相が演説中に銃撃され死亡（7/8）
- 石川忠久死去。90歳。（7/12）
- 森鷗外の自筆原稿を発見（7/14）
- 車いすテニスの国枝慎吾、生涯グランドスラム達成（7/10）
- 芥川賞・直木賞発表。芥川賞は高瀬隼子「おいしいごはんが食べられますように」、直木賞は窪美澄『夜に星を放つ』（7/20）

📖 デジタル教科書に関するアンケート

2022年4月25日、文科省は第二回教科書・教材・ソフトウェアの在り方ワーキンググループにおいて、「新学習指導要領が目指す方向性と教科書・教材・ソフトウェアの在り方について」を提出した。この資料内において、「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」（2021年11～12月実施）の概要が示された。デジタル教科書を使用した児童生徒、教職員の大規模アンケート結果が提示されている。



書多数。

👤 森鷗外の自筆原稿を発見

文京区立森鷗外記念館は、2022年7月14日、森鷗外の晩年の代表作「洪江抽斎」



研究会・展覧会だより

特別展「鷗外遺産」（仮称）

【会期】2022年10月22日（土）～2023年1月29日（日）
【場所】文京区立森鷗外記念館



全国大学国語教育学会 第143回千葉大会

【日時】2022年10月15日（土）・16日（日）
【場所】千葉大学 西千葉キャンパス
【対面】



日本近代文学会 2022年度秋季大会

【日時】2022年10月22日（土）・23日（日）
【場所】同志社大学今出川キャンパス
【ハイブリッド形式での開催】



日本語学会2022年度秋季大会

【日時】2022年10月29日（土）・30日（日）

【場所】オンライン

全国高等学校国語教育連合会 第55回研究大会 岡山大会

【日時】2022年11月17日（木）
【場所】倉敷市芸文館



日本漢字学会 第5回研究大会

【日時】2022年11月19日（土）～20日（日）
【場所】早稲田大学 早稲田キャンパス
【オンラインもしくはハイブリッドの可能性あり】



※開催にあたっては、変更の可能性があります。学会・研究会HPをご確認ください。

今年には高校の新学習指導要領実施の初年度で、新課程、新教科書、新評価規準など新づくしの元年です。国語教科書も「話す・聞く、書く、読む」の3領域で新しい試みがなされています。そして業界で一気にデジタル化が進み、弊社もデジタル版国語便覧や、動画が観られるQRコード付きの便覧、完全なオンライン探究教材『アクチュアル』などを発売してきました。さらには、全ての指導資料も「大修館クラウド」で閲覧・ダウンロードができるようになりました。新しいことに挑戦するには大きなエネルギーが必要ですが、私もこの日進月歩のデジタル知識を日々吸収し、少しでも現場の先生や学生に役立つように精進して参りたいと思います。 東京支店 邱偉利



我が家には五歳の息子がいます。子供が母国語を習得する過程はどういうものか、親として何を教えればいいのか見当もつかないまま、いつの間にか息子はちゃんと日本語を話すようになっていました。息子はテレビが好きで、テレビの音声と同時に字幕も見えて、簡単な漢字なら読めるようになっており、驚かされました。本人には、まだ小学校で漢字を習っていないから読めないんだ、という考えは当然ありません。ひらがなと漢字の区別を意識せずに、耳と目から入った情報を記憶して母国語を話しています。私も息子を見習い、先入観をもたずに、何事にもチャレンジしていこうと思いました。

関西支店 岡本正孝



ちょうど秋です。高校三年生のとき、授業で「舞姫」を読み始めました。読み進めるうちに、「豊太郎、最低だな。」などという声がちらほらあがりました。読み終わった後もその評価は覆らず、むしろさらに悪化し、教室内は（特に女子からの）怒りと非難の声が混じった、どんよりとした雰囲気……。 「何かもつと考えられることがありそうだな」というスッキリしない気持ちを覚えつつも、「主人公が最低な物語」として授業は終わってしまいました。

それから十数年後。小誌の担当になり、森鷗外特集させてもらえることになりました。さまざまな方からのご原稿を拝読するうちに、当時から残っていたものもやした気持が少しずつ雲散し、晴れ渡っていくようでした。授業の続きを心地よく聴いている気分です。

このような感慨深さも、高校生で名作に触れたからこそだと思います。読書の秋。鷗外作品を生徒さんにおすすめるようになってはいかがでしょうか。（新）

詩の作品 大募集！

詩人の和合亮一先生による連載「詩の教室へようこそ」では、高校生による詩の創作作品を募集いたします。お寄せいただいた作品は、和合先生に選んでいただき、優れたものを連載の中でご紹介いたします。作品が掲載された方には、大修館オリジナルグッズをプレゼント！

下のQRコードから奮って応募ください。郵送も可。



国語教室 第118号
2022年10月15日発行

編集室 国語教室編集室
発行人 鈴木 一行
印刷所 広研印刷株式会社
発行所 株式会社 大修館書店
〒113-8541 東京都文京区湯島2-1-1
電話 03(3868)2651(販売部) 03(3868)2290(編集部)

出版情報 <https://www.taishukan.co.jp>